多賀城関連遺跡発掘調査報告書第22冊

桃生城跡 V

宮城県多賀城跡調査研究所

序　文

当研究所では、特別史跡多賀城跡の調査とともに、宮城県内に所在する古代城柵遺跡および郡家遺跡の発掘調査を実施している。事業の目的は、古代陸奥国府多賀城の役割や性格を総合的に解明するためには、これらの下部組織である官衙の実態を把握することが不可欠であり、また、調査の成果をもとに保存措置がとられていないこれらの遺跡を史跡指定することにより保存・活用するための資料を得ることにある。本事業は多賀城関連遺跡調査５ヵ年計画を積み重ねる方法で、昭和49年から継続して実施している。

本年度は平成６年度を初年度とする第５次５ヵ年計画の３年目の調査であり、昨年に引き続き宮城県桃生郡河北町と桃生町にかけて所在する桃生城跡の調査を実施した。桃生城跡自体の調査としては５次調査にあたる。

これまでの外郭線の調査で、北辺および東辺は土塁であるのに対し、北外郭北西隅では基底幅６尺の築地であるなど、区画施設に性質の異なる施設を併用しているらしいことは確認できたが、それぞれの接続関係などについては問題を残していた。

そのため、本年の調査の目的を桃生城の範囲を確定する上でまだ未確定であった外郭南辺、東辺、西辺の位置と構造の解明においた。調査では住宅に関わる土取りで破壊されているところもあって、発掘調査３地点の他は、断面調査５箇所によらざるをえなかった。

その結果、外郭南辺地区で材木列塀とそれに伴う大溝を検出し、桃生城の南辺を確定できた。また南東隅付近では尾根線の両端における古代の土取り穴の存在から外郭線の位置を推定できた。とりわけ、桃生城の範囲が東西約８００ｍ、南北約６５０ｍほどと判明できた点で意義があったと自負している。また、区画施設の種類も場所によって異なっていることが確認された。

本報告書はこれらの成果をとりまとめたものである。

計画段階から調査まで種々ご指導・ご助言を賜りました多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生をはじめ、文化庁、共催していただいた河北地区教育委員会、桃生町教育委員会、調査地の提供をご快諾くださいました地主の皆様、地区をまとめて頂いた区長、さらに、直接調査に携わった地元の作業員の皆様に心から感謝申しあげます。

本報告書が東北古代史解明の資料として広く活用され、遺跡の保護活用に寄与することができれば幸いであります。

平成９年３月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長　進藤秋輝

目　次

Ⅰ．調査要項 …… 1
Ⅱ．多賀城関連遺跡の調査計画 …… 1
Ⅲ．これまでの調査の概要 …… 4
Ⅳ．第５次調査の目的と経過 …… 4
Ⅴ．発見された遺構と遺物 …… 8
（１）外郭南辺西端地区 …… 8
（２）外郭東辺南半地区 …… 20
（３）断面調査地点 …… 27
Ⅵ．考察 …… 28
写真図版

例　言

１．本遺跡の測量については、第Ｘ系座標Ｘ＝－163,020．000ｍ、Ｙ＝39,000.000ｍ、Ｈ＝65.440ｍを原点とし、発掘基準線の北はこの座標北と一致する。本書で用いた方位はこの基準線をもとに計測したものである。

２．土色については『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1976）を参照した。

３．本書の作成にあたっては、進藤秋輝、丹羽茂、阿部恵、佐藤和彦、柳澤和明、白崎恵介の討議・検討をもとに、阿部恵、佐藤和彦、柳澤和明、白崎恵介が執筆・編集した。

Ⅰ．調査要項

1．遺跡名　　桃生城跡
2．所在地　　宮城県桃生郡河北町飯野字中山・字碓畑・字高屋敷、同郡桃生町太田字沢入畑
3．調査主体　　宮城県教育委員会（教育長　鈴鴨　清美）
4．調査共催　　河北地区教育委員会（教育長　松澤　俊男）
　　桃生町教育委員会（教育長　遠山　博久）
5．調査指導　　多賀城跡調査研究指導委員会（委員長　芹沢　長介）
6．調査担当　　宮城県多賀城跡調査研究所長　進藤　秋輝
7．調査期間　　平成８年７月15日～10月11日
8．調査面積　　約800㎡
9．体験学習　　桃生郡桃生町立中津山第二小学校　千葉宗久ほか児童、ＰＴＡ有志
10．地元協力者　地権者：小出正夫、金子浩章、藤田安友、千葉栄光、柳田新弥、伊藤信雄、千葉忠悦、佐藤栄一、佐藤末子、小出勝重、近藤幸治
　　区　長：小出正夫
　　作業員：伊藤良一、小出正夫、佐々木清美、小出新吾、伊藤幸一、岡田正七、佐々木市子、小出京子、佐藤のぶ子、小出いく子、高石とよ子、千葉せい子、千葉勝子、阿部とみ子、三浦まつよ、伊藤ふみ子、伊藤やゑ子

Ⅱ．多賀城関連遺跡の調査計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の調査研究と並行して、宮城県内に所在する多賀城と密接に関連する城柵・官衙遺跡や生産遺跡についての調査研究を、昭和49年度以来継続的に実施してきている。この調査研究事業は、古代を通して陸奥・出羽両国を中央政府と密接な連携のもとに支配する中枢的な役割を果たした多賀城を、多角的な視野から解明するとともに、これらの諸遺跡を保護・保存することを目的としたものである。

多賀城関連遺跡の調査研究は、多賀城跡調査研究指導委員会の指導に基づき５ヵ年計画を立て、その年次計画に従って実施している。

第１次５ヵ年計画（昭和49～53年）では49・50両年に桃生郡河北町と桃生町にまたがって所在する桃生城跡を、51～53年には栗原郡築館町に所在する伊治城跡を調査した。第２次５ヵ年計画（昭和54～58年）では54年に伊治城跡を、55～58年には古川市に所在する名生館官衙遺跡を調査した。第３次５ヵ年計画（昭和59～63年）では59・60年に名生館官衙遺跡を、60年には玉造郡岩出山町合戦原窯跡群を併せて調査し、61～63年には加美郡宮崎町に所在する東山遺跡を調査した。第４次５ヵ年計画（平成元～５年）では元～４年に東山遺跡を、５年には志田郡三本木町・松山町下伊場野窯跡群を調査した。

第５次５ヵ年計画（平成６～10年）は、平成５年６月に開催した第29回多賀城跡調査指導委員会で承認を得た。初年度の平成６年度は、桃生城跡の政庁地区と外郭北辺地区を対象とする第３次調査を実施し、併せて地形図（1/1,000）を作成した。その結果、政庁の建物配置と変遷、外郭北辺の区画施設の規模と構造を把握することができた。２年次の７年度は、政庁南東隅と外郭東辺・北西隅を対象に第４次調査を行い、政庁の規模と構造、また外郭線の北半の規模と構造をほぼ確定することができた。そして桃生城の規模が東西約700ｍ以上であることが判明した。

そこで、第５次５ヵ年計画の３年次に当たる平成８年度は、平成７年６月に開催した第31回多賀城跡調査研究指導委員会で修正案の承認を得た第５次５ヵ年計画（表１）に基づき、外郭南半を対象とする桃生城跡の第５次調査を実施した。総事業費は17,000千円（国庫補助50%）である。

年度	遺跡名	事業	内容
6年度	桃生城跡	第3次調査	政庁の建物配置、北辺外郭線の確認
7年度	桃生城跡	第4次調査	政庁南東隅、東辺・北西隅外郭線の確認
8年度	桃生城跡	第5次調査	東辺外郭線の確認
9年度	桃生城跡	第6次調査	実務官衙の確認
	亀岡遺跡	第1次調査	確認調査
10年度	亀岡遺跡	第2次調査	遺構の構成の把握

表１　多賀城関連遺跡調査第５次５ヵ年計画（平成７年６月修正）

河北町

	遺跡名	種別	時代
1	桃生城跡	城柵	古代
2	高屋敷遺跡	包含地	古代
3	飯野館跡	城館	中世
4	新田東遺跡	包含地	古代
5	問答山遺跡	包含地	古代
6	赤間館跡	城館	中世
7	外吉野遺跡	包含地	古代
8	後谷地遺跡	包含地	古代
9	沢田山西遺跡	包含地	古代
10	七郎館跡	城館 包含地	古代、中世
11	大森城跡	城館	中世
12	成田遺跡	包含地	古代
13	日影貝塚	貝塚	縄文前
14	山崎館跡	城館	中世
15	相野谷館跡	城館	中世
16	和泉沢古墳群	円墳	古代
17	合戦谷古墳	古墳	古墳後

桃生町

	遺跡名	種別	時代
18	万歳山A遺跡	包含地	縄文
19	万歳山B遺跡	包含地	奈良・平安
20	細谷B遺跡	包含地	奈良・平安
21	太田窯跡	窯跡	奈良
22	細谷遺跡	包含地	縄文晩、古代
23	宗全山遺跡	包含地	古代
24	拾貫壱番遺跡	包含地	奈良・平安 近世
25	日高見神社遺跡	包含地	縄文、古墳後
26	安部館跡	城館	中世
27	角山遺跡	包含地	奈良・平安 中・近世
28	太田館跡	城館	中世
29	中津山城跡	城館	中世・近世
30	白鳥古墳	古墳	古墳
31	八幡館跡	城館	中世
32	沢山城跡	城館	中世
33	永井館跡	城館	中世
34	壇ノ森館跡	城館	中世
35	黄竜渕館跡	城館	中世
36	樫崎館跡	城館	中世
37	樫崎貝塚	貝塚	縄文早・中
38	陣ヶ峯館跡	城館	中世
39	山田囲古墳	古墳	古墳後
40	山田館跡 （館山城）	城館 包含地	古代、中世

津山町

	遺跡名	種別	時代
41	館ヶ森館跡	城館	中世
42	十所貝塚	貝塚 包含地	縄文早・中 古代

豊里町

	遺跡名	種別	時代
43	武田屋敷跡	屋敷跡	江戸
44	御蔵場跡	蔵場跡	江戸

表２　桃生城跡と周辺の遺跡

第１図　桃生城跡と周辺の遺跡

Ⅲ．これまでの調査の概要

昭和49・50年に桃生郡河北町飯野字中山の通称「長者森」で実施した第１・２次調査によって、築地塀跡や正殿・後殿と考えられる柱筋を揃えた東西５間、南北２間の掘立式建物跡２棟（ＳＢ01・ＳＢ02建物跡）などを検出し、桃生城の政庁と外郭北辺の区画施設の一部を把握した（第２図）。

第１・２次調査から20年経ち、桃生城跡の南、西に広がる水田地帯において、大規模な圃場整備事業が計画され、桃生城跡周辺地域がその客土取得用地にあてられるという危険性が生じた。そのため、桃生城跡の範囲確定が急務となり、平成６年度の多賀城関連遺跡発掘調査事業は、再び桃生城跡に戻り、第３次調査を実施した。

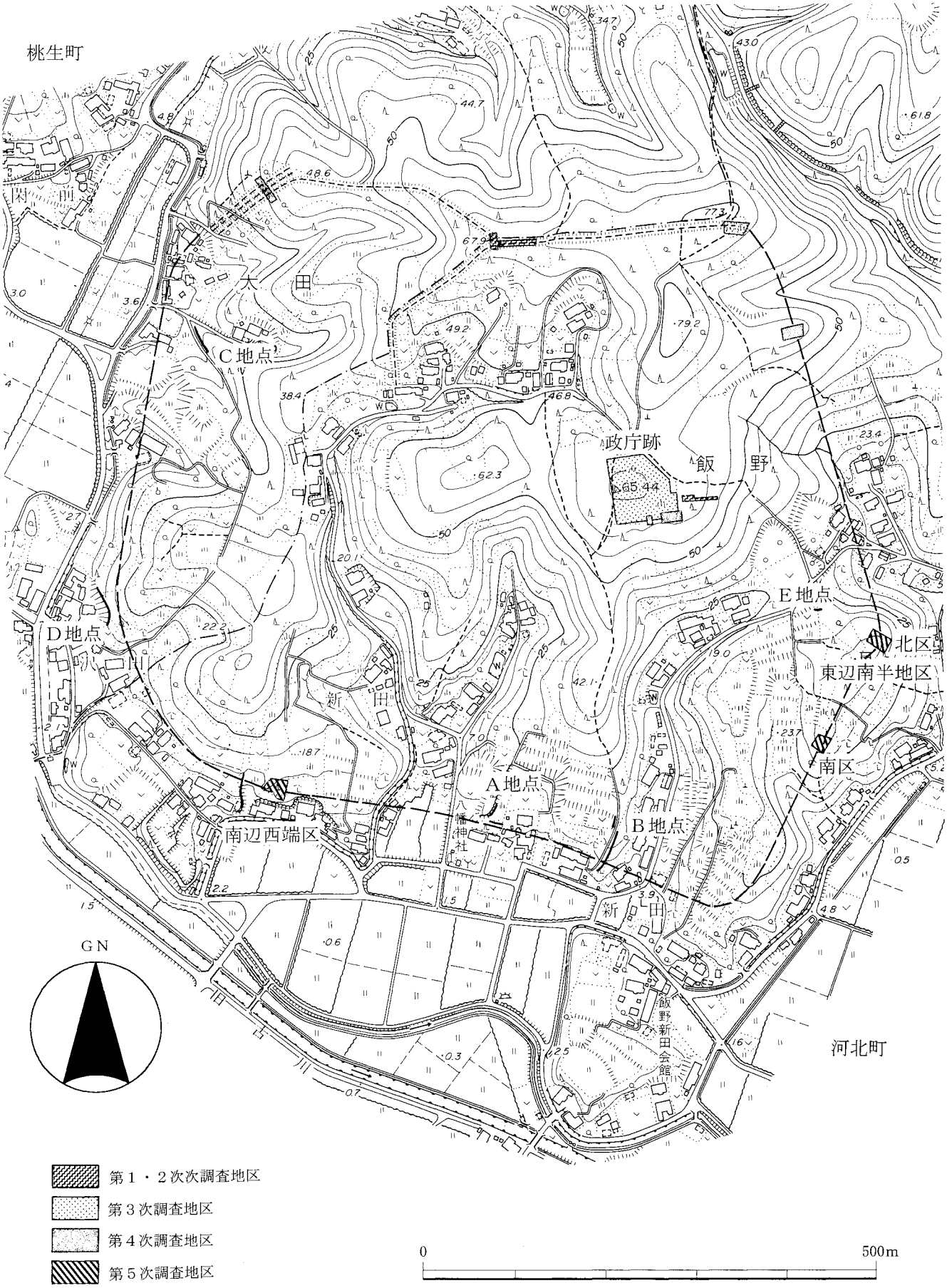
第３次調査では、これまでの調査や踏査による想定に基づき、政庁の建物配置と規模を確定するため、ＳＢ01・02建物跡を含めて推定政庁域のほぼ全面を調査した。また、外郭線の位置と構造を明らかにするために、外郭北東隅と想定される地点を併せて調査した（第２図）。この政庁地区の全面調査により、正殿、東・西脇殿、後殿からなる建物配置が明らかになった。それが多賀城政庁第Ⅱ期の構成と似ていること、それらの建物がいずれも掘立式で、瓦葺きであること、政庁の建物と築地塀は、宝亀５（774）年７月の海道の蝦夷の蜂起によると見られる火災によって焼失し、その後は再建されていないことがわかった。また、政庁の東辺築地の基礎を発見し、不明確であった政庁の東西規模が70mほどであることが判明した。桃生城跡の範囲確認を目的とした外郭北東隅推定地の調査では、区画施設は土塁であり、北辺の長さは600m以上であることがわかった。

平成７年度の第４次調査では、政庁の東辺・南辺築地塀跡の正確な規模や構造を把握することを目的に政庁南東隅の、外郭東辺と北辺の範囲を明確にすることを目的に外郭東辺、外郭北西隅の調査を行った。その結果、政庁南東隅で、基底幅約2.1mの南辺・東辺築地塀を検出し、政庁の規模が東西約66m、南北約72mであることがほぼ確実になった。また、外郭線の調査では、東辺地区で２条の土塁跡とそれらに挟まれた大溝を、北西隅地区で３条の土塁跡とそれらの内側にある３条の溝を検出した。この内、最も内側の土塁の芯は基底幅1.8mの築地塀跡であることが知られた。そして、これらにより、桃生城の東西の規模が約700mであることが判明した。

Ⅳ．第５次調査の目的と経過

〔調査の目的〕

桃生城跡の外郭についてはこれまでの調査で、土塁状の高まりの残る北辺・北東隅・北西隅、および現地形では外郭施設の存在が明瞭でない東辺北半の調査で、それぞれ築地塀跡・土塁跡・溝などの区画施設を検出した。これらにより、外郭の北半部についてはほぼ明らかにすることができた。一方、外郭南半部では旧地形の改変が著しく、外郭区画施設の痕跡などが現地形に明確に認められる地点はほとんどない。そこで第５次調査では、外郭南半部の区画施設を検出し、桃生城跡全体の規模を明確



第２図　桃生城跡地形図（1／6,000）

にすることを目的とした。

〔調査の経過〕

前述の目的のため、第５次調査は、外郭南辺西端１ヵ所、東辺南半２ヵ所(北・南区)の３地区を対象に発掘調査を実施し、併せて外郭推定線上で崖面などに地層の断面が表れている南辺２ヵ所(Ａ・Ｂ地点)、西辺２ヵ所(Ｃ・Ｄ地点)、東辺１ヵ所(Ｅ地点)の５地点で断面の調査を行うこととした(第２図)。

合計８ヵ所の調査予定地については、４月初旬に下見をし、その候補地を選定した。そして４月下旬から６月にかけて、これらの土地の所有者に今年度の調査の概要について説明するとともに、発掘調査や断面調査に対する同意とそれに伴う立木伐採について交渉をし、６月21・25日に全員の同意を得られた。

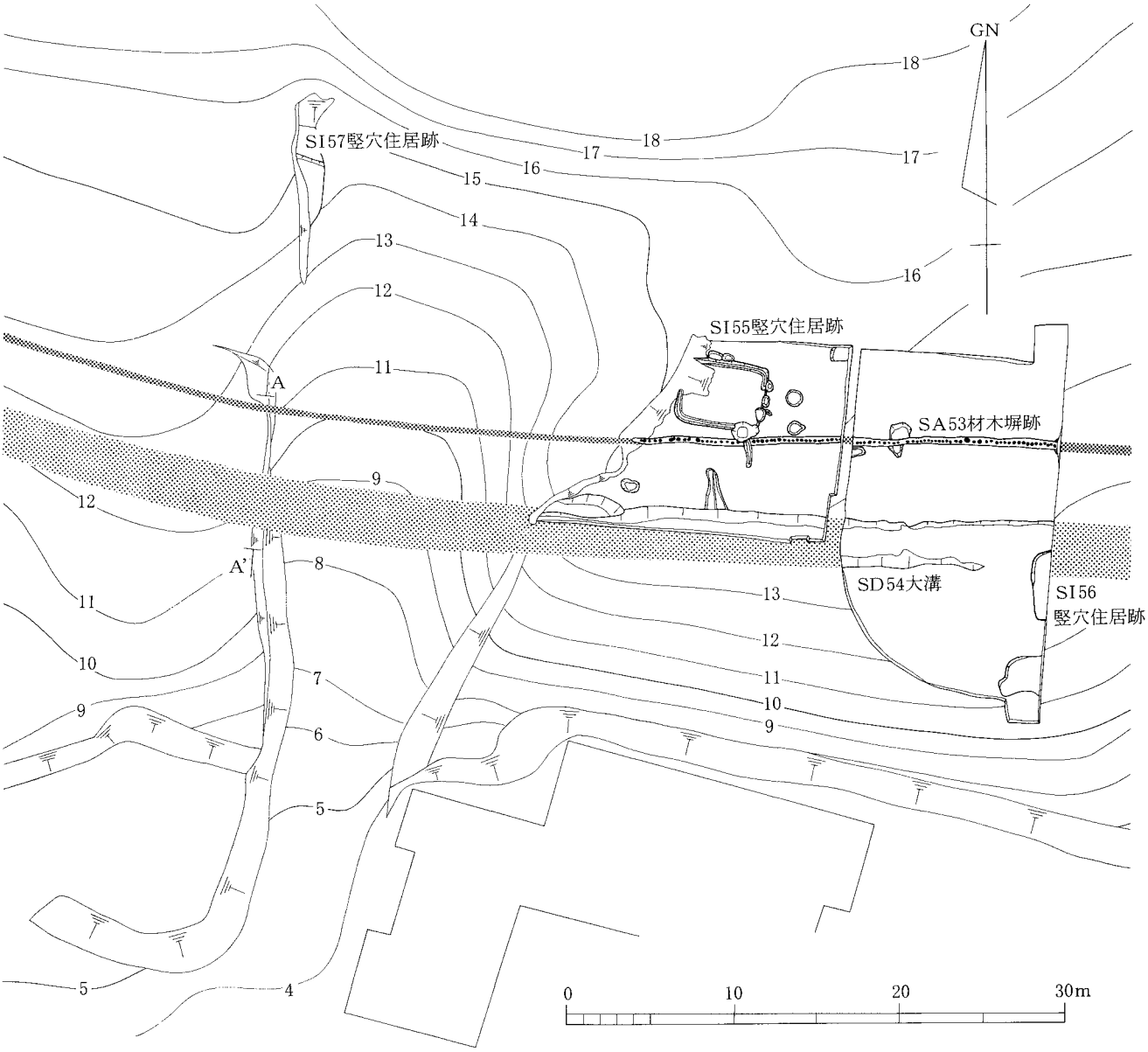
７月２日から調査予定地の立木の伐採を開始し、伐採した材木の搬出や枝葉の片付けを順次行った。また、立木の伐採作業と並行して、７月１日には発掘器材を現地に搬入して、区画施設の有無を確認する断面調査を、Ｅ地点・Ａ地点・Ｂ地点・Ｄ地点・Ｃ地点の順に実施した。各地点で断面削りを行った結果、区画施設は検出できなかったが、Ａ地点で竪穴住居跡２棟、Ｂ地点で竪穴住居跡１棟を検出した。東辺南半地区の発掘調査は７月15日に開始した。

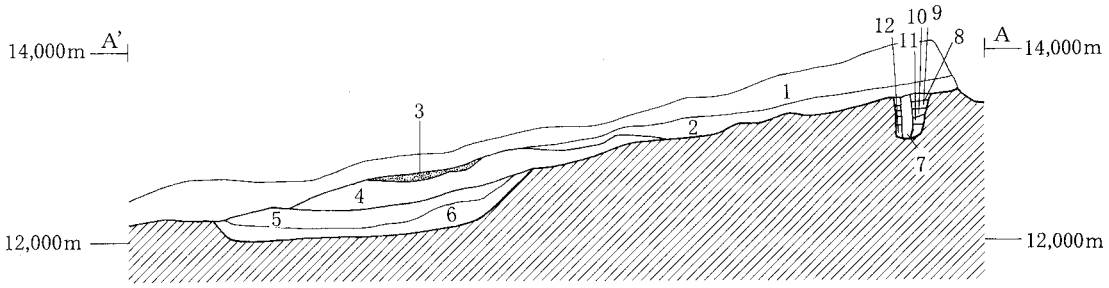
東辺南半地区は、第４次調査の外郭東辺調査区から南に約350m離れた地点に北区、約450m離れた地点に南区を、北辺区画施設が尾根線上を走ることを勘案して丘陵尾根上に設定した。調査区内の木の根を抜根し、手掘りで表土を除去したところ、北区・南区とも明瞭な区画施設は検出できなかったが、北区では、尾根の両側から区画施設の土取り穴と思われる土壙７基、内側から竪穴住居跡１棟を検出した。南区でも、尾根の両側から北区と同様の土壙５基を検出した。

南辺西端地区の調査は、東辺南半地区の調査にほぼ見通しがついた８月下旬から開始した。平成４年に大きく土取りされた箇所の東側、丘陵の南端部分に、東西30m、南北12～24mの調査区を設定し、表土を除去したところ、緩斜面の等高線に沿う形で東西に延びるＳＡ53材木塀跡とその約６ｍ南で、材木塀と併行して走るＳＤ54大溝を検出し、これらが外郭南辺の区画施設であることを確認した。このほかに竪穴住居跡２棟、土壙12基、溝やピットなどの遺構も検出した。さらにこの調査区西端から約22m離れた土取り箇所の西壁断面を調査したところ、ＳＡ53材木塀跡とＳＤ54大溝の西延長線上でこれらに連続する材木塀と大溝を検出した。竪穴住居跡も１棟検出した。

検出した各遺構は順次精査を進め、遺構精査の進んだ各遺構については随時写真を撮影し、調査の進捗に合わせてそれぞれの断面図を作成した。また、平面図は南辺西端地区以外は平板により1/100の図を作成し、レベル測量をしている。９月10日からは南辺西端地区の調査区全体に３ｍ単位の測量基準点を設定し、1/20の平面図の作成を開始し、９月17日からは平面図のレベル測量をした。

９月25日には桃生城跡第５次調査の成果を報道機関に対して公表し、９月28日午後には一般を対象とした現地説明会を開催した。これに先立つ９月26日には多賀城跡調査研究指導委員会の現地指導を受けた。また、10月３日にはラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。10月11日には各調査地区の埋め戻しを終え、調査を終了した。





No.	土色・土性	概　　要	No.	土色・土性	概　　要
1	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山小礫を少量含む。【表土】	7	黒褐色(5YR2/1)粘質シルト	地山小礫を多量含む。【SA53材木塀柱痕跡】
2	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山小礫を少量含む。【堆積土1層】	8	極暗褐色(7.5YR2/3)シルト	地山小礫を少量含む。【SA53材木塀掘方】
3	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	灰白色火山灰のブロックを含む。【堆積土2層】	9	暗褐色(10YR3/4)シルト	地山小礫を多量含む。【SA53材木塀掘方】
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	地山小礫を少量含む。【堆積土3層】	10	明黄褐色(10YR7/6)シルト	地山小礫を主体とする。【SA53材木塀掘方】
5	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山小礫を多量含む。【SD54大溝1層】	11	明黄褐色(10YR6/6)シルト	地山小礫を主体とする。【SA53材木塀掘方】
6	にぶい褐色(7.5YR5/3)シルト	地山小礫を多量含む。【SD54大溝2層】	12	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山小礫を多量含む。【SA53材木塀掘方】

第３図　外郭南辺西端地区全体図とＳＡ53材木塀跡・ＳＤ54大溝

Ⅴ．発見された遺構と遺物

（１）外郭南辺西端地区

この地区には地権者によって大きく土取りされ、地形が大きく改変された部分があり、土取り箇所の西壁断面に大溝が観察されていた(図版２－1)。本調査地区はこの土取り箇所の東側に設定したもので(第３図)、調査面積は約375㎡である。また、調査地区西端より約22m離れた土取り箇所西壁でも断面調査を行った。

調査の結果、外郭南辺の区画施設である材木塀跡１条、材木塀跡に伴う大溝１条、竪穴住居跡３棟、土壙12基、溝２条の他、多数のピットを検出した(第３・４図、図版１・２)。遺構の検出面は表土下の黄褐色粘質土の地山面である。

【外郭南辺区画施設】

調査地区の位置する南に延びる丘陵は、標高10m付近より傾斜が急になり、丘陵裾の沖積面に移行している。この傾斜変換点よりやや上の標高14～15m付近で外郭南辺区画施設の材木塀跡を検出した。また、その南の標高13～14m付近で、材木塀跡の外側に平行して延びる大溝を検出した。材木塀跡と大溝とは心々で約６m離れている。

ＳＡ53材木塀跡（第３・４図、図版１－2・２）

外郭南辺を区画する東西方向の材木塀跡で、長さ約26.5mにわたって検出した。ＳＫ59・67～69土壙、ＳＩ55竪穴住居跡の外延溝とみられるＳＤ71溝と重複してこれらよりも古い。ほぼ直線的で、方向は西で北に約２°偏る。この材木塀跡は約22m離れた土取り箇所西壁の断面でも検出された。やはり標高14m付近に位置しており、調査区で検出した材木塀跡の西方向の延長線上より北に約２mずれていた。土取りされた箇所は失われているものの、丘陵裾の傾斜変換点よりやや上で、ほぼ同じ標高の位置に設置されている。

材木塀跡の掘方は布掘状で、幅35～50cm、深さ40～50cmある。掘方の埋め土は径２～３cmの明黄褐色地山粒を多量に含む黄褐色土と暗褐色土の互層である。掘方に重複はない。柱痕跡は径17～25cmの円形で、２cm以下の地山小礫を少量含む暗い褐色土である。掘方のほぼ中心部で、密接して並ぶ柱痕跡を83個検出した。丸材を密接して立て並べた材木塀とみられる。

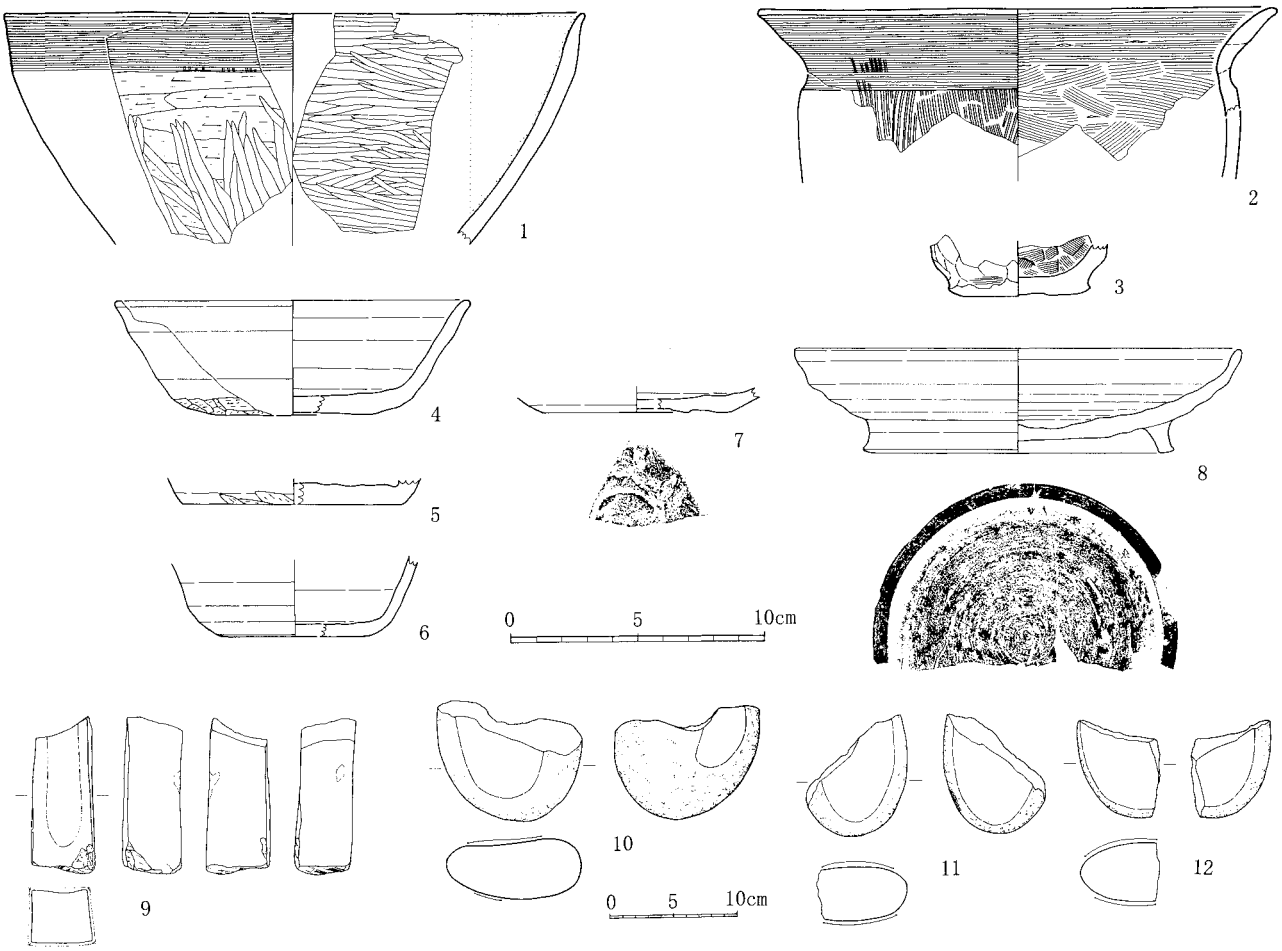
遺物は確認面より非ロクロ調整の土師器甕の体部・底部破片各１点、須恵器坏体部破片１点が出土した。

ＳＤ54大溝（第３～５図、図版１－2・２・３－1・６）

調査地区内で長さ約36mにわたって検出した。重複関係からみて、ＳＤ70溝より新しく、ＳＫ65土壙よりも古い。また、位置的にみてＳＩ56竪穴住居跡と重複するが、この部分で堆積土が削平されて残っていなかったため、新旧関係は把握できなかった。

ＳＡ53材木塀跡の南に心々で約６m離れて位置し、ＳＡ53材木塀跡と平行する。ほぼ直線的で、方

第４図　南辺西端調査地区全体図



番号	種　類	特　　徴	登録	箱番号	番号	種　類	特　　徴	登録	箱番号
1	土師器鉢	外面：横ナデ、ケズリ、ミガキ 内面：ミガキ→黒色処理	R47	12712	7	須恵器坏	ヘラ切り。底径7.4cm	R45	12712
					8	須恵器高台坏	回転ケズリ→付高台。口径17.6cm 器高4.1cm、高台径12.2cm。	R41	12712
2	土師器甕	非ロクロ。横ナデ、刷毛目。	R48	12712					
3	手捏ね土器	手捏ね。底径5.6cm。	R46	12712	9	砥石	極細粒砂岩製。直方体状。5面研磨。	R102	12714
4	須恵器坏	手持ちケズリ。口径14.0、器高4.5cm	R42	12712	10	磨石	安山岩製。破損。	R103	12714
5	須恵器坏	手持ちケズリ。底径8.6cm。	R44	12712	11	磨石	砂岩製。破損。	R104	12714
6	須恵器坏	手持ちケズリ。底径6.2cm	R43	12712	12	磨石	砂岩製。破損。	R105	12714

第５図　ＳＤ54大溝出土遺物

向はＳＡ53材木塀跡と同じく西で北に約２°偏る。約22m離れた土取り箇所西壁の断面でも検出したが、この大溝の西方向の延長線上より北に約２ｍずれていた。土取箇所は失われているものの、ＳＡ53材木塀跡と平行し、かつ丘陵裾の傾斜変換点よりやや上で、ほぼ同じ標高の位置に設置されている。

上幅約3.0m、下幅約1.6m、深さ約60cmで、断面形はU字形である。溝の堆積土は２層に分れる。１層は１cm以下の地山粒・小礫を多く含む暗褐色土、２層は２～３mmの地山粒・小礫を多く含むにぶい褐色土で、いずれも自然堆積層である。土取り箇所西壁の断面では、この溝の上を覆うにぶい黄褐色土の土層（第３図３層）に10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰層があり、この溝が10世紀前葉にはすでに埋まりきっていたことが知られる。

出土遺物（第５図）には土師器、須恵器、砥石（９）、磨石（10～12）が少数ある。

土師器はすべて非ロクロ調整のもので、鉢（１）・甕（２）・手捏ね土器（３）の破片がある。１の鉢は外面が縦方向のハケメで調整された後、体部が横方向に手持ちヘラケズリされ、さらに口縁部が

ヨコナデ、体下部がヘラミガキされている。内面はヘラミガキの後に黒色処理されている。２の甕は外面体部が縦方向のハケメ調整の後に口縁部がヨコナデされ、内面は口縁部がヨコナデ、体部が横方向にハケメで調整されている。

須恵器には坏（４～７）・高台坏（８）・蓋・甕・鉢の破片がある。４～６の坏は底部の切り離しが不明で、４・５は体下部～底部、６は底部が手持ちケズリされている。７はヘラ切りである。８の高台坏は底部が回転ケズリされている。

【竪穴住居跡】

ＳＩ55竪穴住居跡（第４・６～８図、図版３－2）

調査地区北西部に位置する。平面形は長方形で、規模は東西約4.9m・南北約4.0mである。方向は北辺でみると、西で北に約11°偏る。北西部は土取りにより床面下まで削平されている。また、ＳＫ59～64土壙と重複してこれらよりも古い。

壁は最も残りのよい北辺で約70cm残存している。住居掘方の底面は地山岩盤となっており、ほぼ全面に厚さ約５cm程貼床し、平坦な床面としている。

四周には幅約20cm、深さ約15cmの断面Ｕ字形の周溝が巡る。周溝は径５～20mmの地山粘板岩片をやや多く含む褐色土である。また、本住居の南東隅から南に1.6m延びる幅約40cm、深さ約20cmの断面Ｕ字形のＳＤ71溝は、位置関係などからみて、本住居の外延溝の可能性がある。

堆積土は４層に分かれる。第２層上面には10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰のブロックが点在する。第１層はしまりのない褐色土で、径５～10mmの地山粘板岩片をやや多く含み、厚さは最大25cmある。第２層は焼土・炭・灰のブロックを不均一に含む褐色土で、厚さは最大10cmある。第３層は径５～10mmの地山粘板岩片をやや多く含む褐色土で、厚さは最大10cmある。第４層は橙色土と褐色土が不均一に混ざり、北辺壁際から北周溝上面にかけて堆積する。

遺物は貼床、床面、周溝、堆積土から少数出土した（第７・８図、図版６・７）

貼床から非ロクロ調整の土師器坏・甕体部破片が少数出土した。

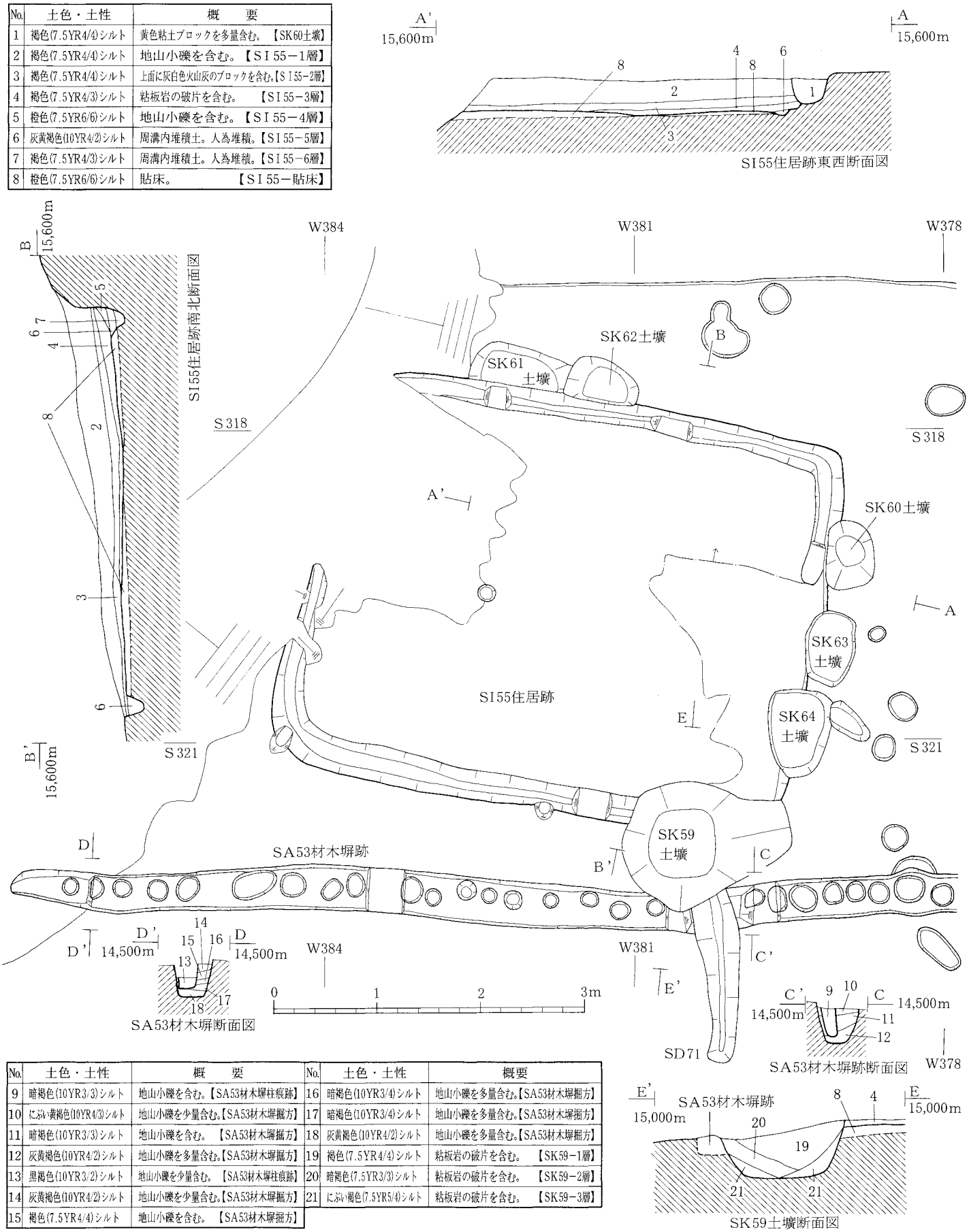
床面からは製塩土器、土師器、須恵器、砥石（４）の破片が少数出土した。須恵器にはヘラ切りの坏の口縁部～底部破片（１）と甕の頸下部～底部破片（２・３）がある。

周溝からは土師器、須恵器、鉄鎌（５）、鞴羽口破片（７）、粘土塊が少数出土した。土師器には非ロクロ調整の坏・甕破片、ロクロ調整で回転糸切り無調整の坏の体下部～底部破片（６）がある。

第２層からは土師器、須恵器、須恵系土器、円面硯(12)の破片が少数出土した。土師器には非ロクロ調整の有段坏の体部破片(10)、甕破片、製塩土器片(13)、ロクロ調整で底部が回転糸切り無調整の坏（８）、底部が静止糸切りの高台坏（９）がある。須恵器には坏・甕破片、須恵系土器には坏の口縁部～底部破片（11）がある。

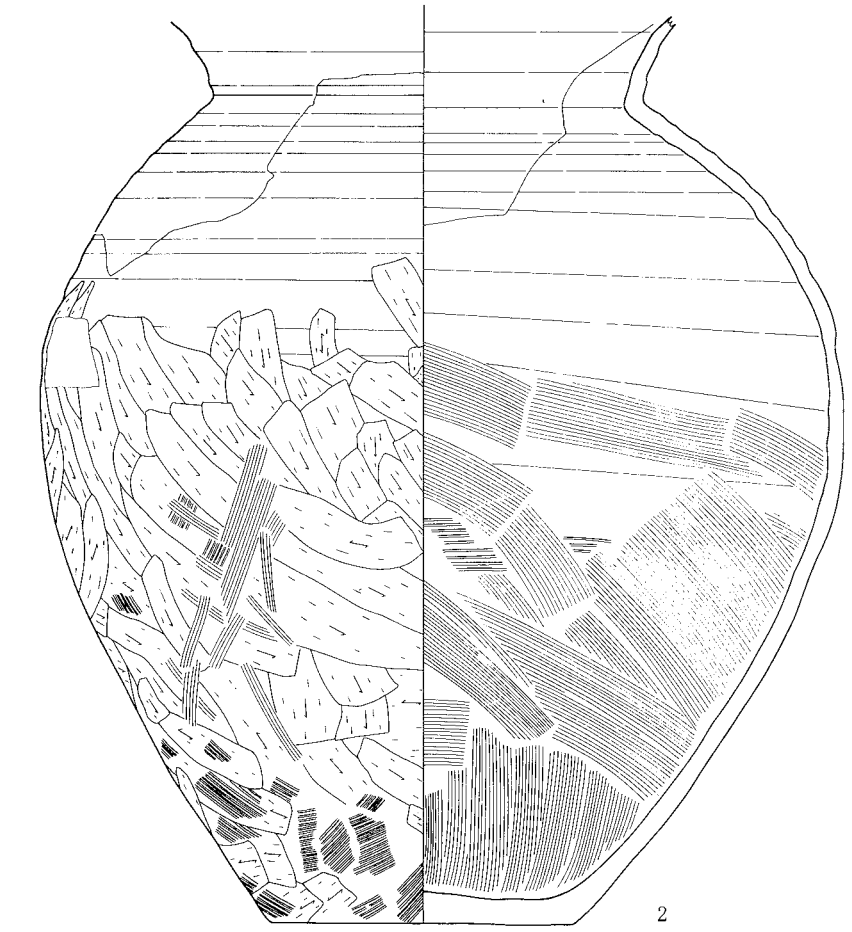
第１層からは土師器、須恵器、刀子(30)、漆皮膜が少数出土した。土師器には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものとがある。非ロクロ調整のものには、内面に漆皮膜の付着する甕底部破片(17)、有段坏の口縁～体部破片（18～20）、手捏ね土器（22）、製塩土器破片（23～29）がある。ロクロ調整

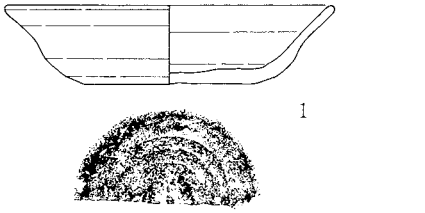
No.	土色・土性	概　　要
1	褐色(7.5YR4/4)シルト	黄色粘土ブロックを多量含む。【SK60土壙】
2	褐色(7.5YR4/4)シルト	地山小礫を含む。【ＳＩ55－1層】
3	褐色(7.5YR4/4)シルト	上面に灰白色火山灰のブロックを含む。【ＳＩ55-2層】
4	褐色(7.5YR4/3)シルト	粘板岩の破片を含む。　【ＳＩ55－3層】
5	橙色(7.5YR6/6)シルト	地山小礫を含む。【ＳＩ55－4層】
6	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	周溝内堆積土。人為堆積。【ＳＩ55－5層】
7	褐色(7.5YR4/3)シルト	周溝内堆積土。人為堆積。【ＳＩ55－6層】
8	橙色(7.5YR6/6)シルト	貼床。　【ＳＩ55－貼床】

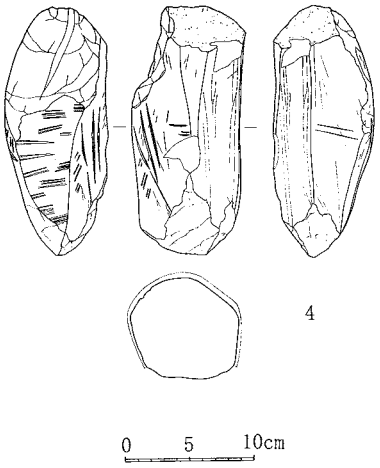


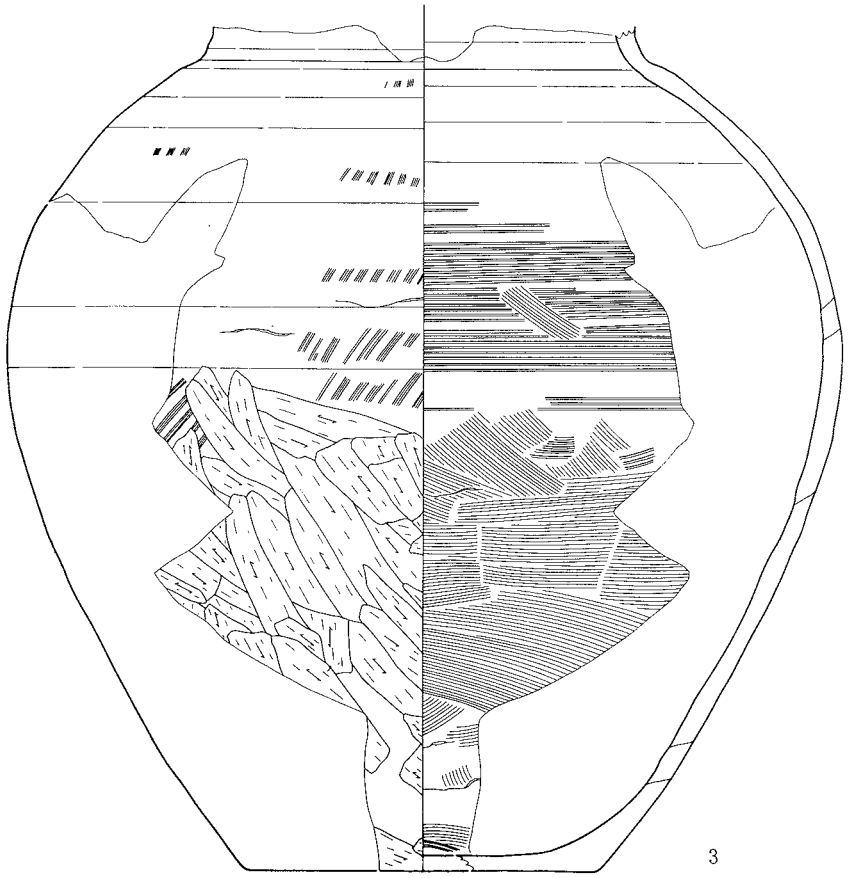
No.	土色・土性	概　　要	No.	土色・土性	概要
9	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山小礫を含む。【SA53材木塀柱痕跡】	16	暗褐色(10YR3/4)シルト	地山小礫を多量含む。【SA53材木塀掘方】
10	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	地山小礫を少量含む。【SA53材木塀掘方】	17	暗褐色(10YR3/4)シルト	地山小礫を多量含む。【SA53材木塀掘方】
11	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山小礫を含む。　【SA53材木塀掘方】	18	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山小礫を多量含む。【SA53材木塀掘方】
12	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山小礫を多量含む。【SA53材木塀掘方】	19	褐色(7.5YR4/4)シルト	粘板岩の破片を含む。　【SK59－1層】
13	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山小礫を少量含む。　【SA53材木塀柱痕跡】	20	暗褐色(7.5YR3/3)シルト	粘板岩の破片を含む。　【SK59－2層】
14	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山小礫を少量含む。【SA53材木塀掘方】	21	にぶい褐色(7.5YR5/4)シルト	粘板岩の破片を含む。　【SK59－3層】
15	褐色(7.5YR4/4)シルト	地山小礫を含む。　【SA53材木塀掘方】			

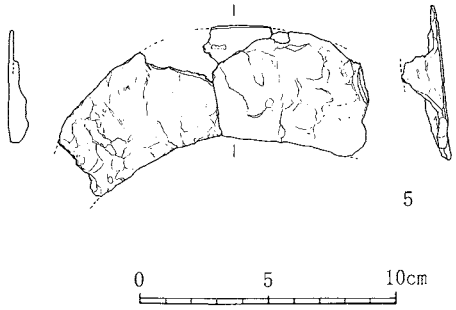
第６図　ＳＩ55竪穴住居跡・ＳＡ53材木塀跡・ＳＫ59土壙平面図・断面図





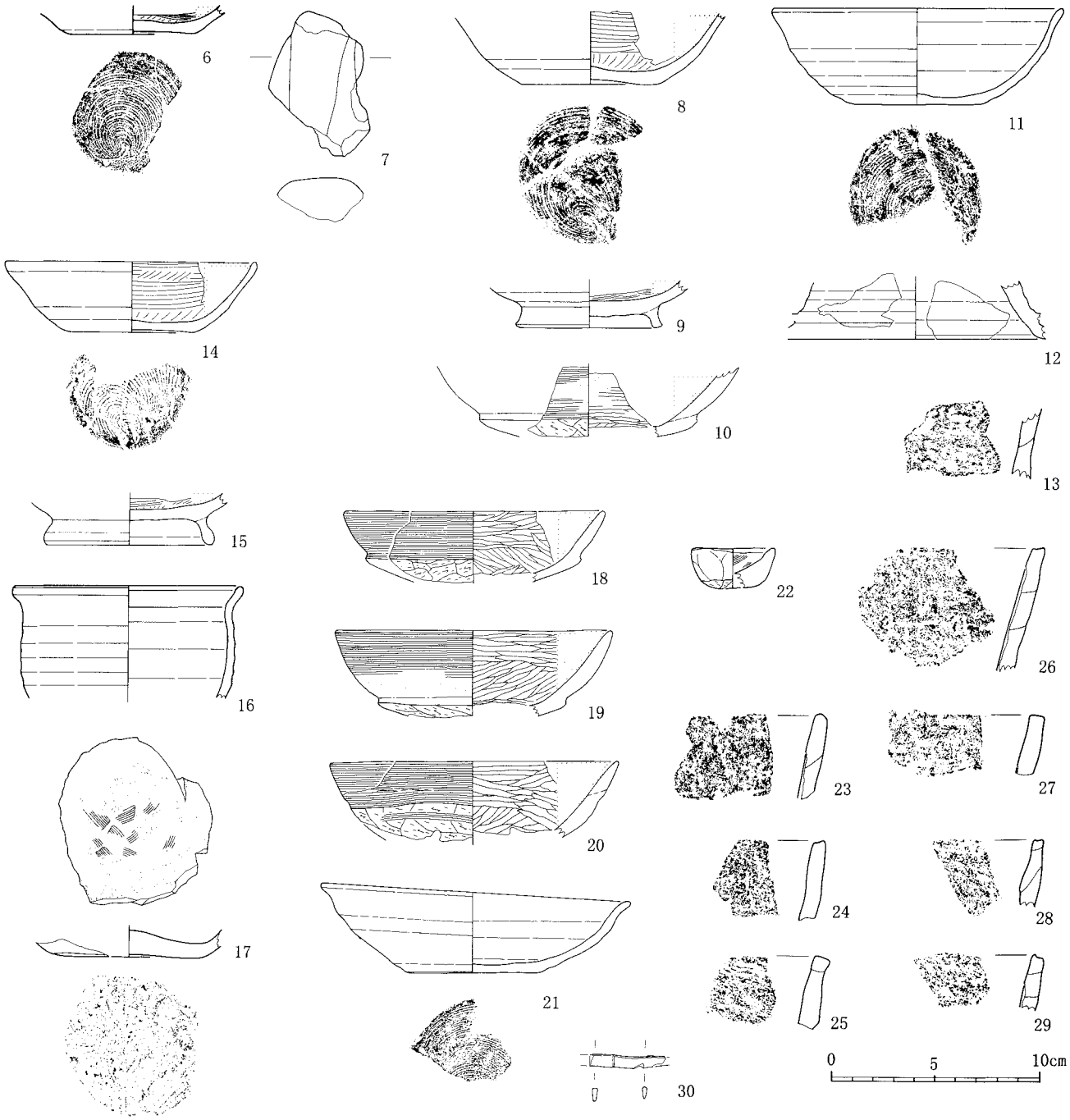






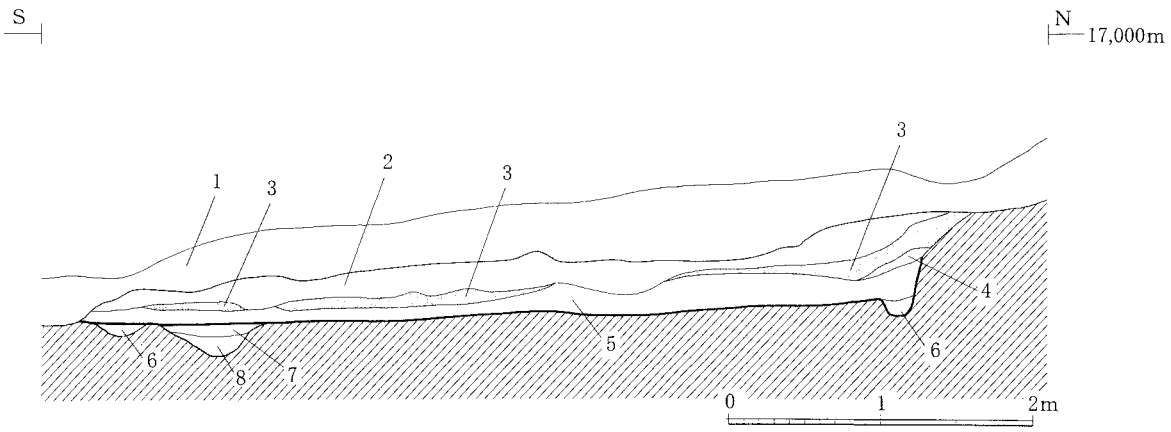
番号	層位	種　類	登録	箱番号
1	床面	須恵器坏	R4	12711
2	床面	須恵器甕	R23	12715
3	床面	須恵器甕	R69	12715
4	床面	砥石	R101	12714
5	周溝	鉄鎌	R111	12719

第７図　ＳＩ55竪穴住居跡出土遺物（１）



番号	層位	種　類	特　徴	登録	箱番号	番号	層位	種　類	特　徴	登録	箱番号
6	周溝	土師器坏	回転糸切り無調整	R16	12712	19	第1層	土師器坏	非ロクロ有段坏	R8	12711
7	周溝	鞴羽口	破片	R18	12712	20	第1層	土師器坏	非ロクロ	R17	12712
8	第2層	土師器坏	回転糸切り無調整	R2	12711	21	第1層	須恵系土器坏	回転糸切り無調整	R3	12711
9	第2層	土師器高台坏	静止糸切一付高台	R15	12712	22	第1層	袖珍	手捏ね土器	R12	12711
10	第2層	土師器有段坏	非ロクロ有段坏	R10	12711	23	第1層	製塩土器	口縁部破片。輪積痕	R121	12719
11	第2層	須恵系土器坏	回転糸切り無調整	R6	12711	24	第1層	製塩土器	口縁部破片。	R120	12719
12	第2層	円面硯	脚部破片	R7	12711	25	第1層	製塩土器	口縁部破片。輪積痕	R123	12719
13	第2層	製塩土器	体部破片。輪積痕	R139	12719	26	第1層	製塩土器	口縁部破片。輪積痕	R126	12719
14	第2層	土師器坏	回転糸切り無調整	R1	12711	27	第1層	製塩土器	口縁部破片。	R122	12719
15	第2層	土師器高台坏	回転糸切一付高台	R14	12712	28	第1層	製塩土器	口縁部破片。輪積痕	R124	12719
16	第2層	土師器小型甕	ロクロ調整	R11	12711	29	第1層	製塩土器	口縁部破片。輪積痕	R127	12719
17	第2層	土師器甕	木葉痕。漆付着	R13	12711	30	第1層	刀子	平棟平造り。	R114	12719
18	第1層	土師器坏	非ロクロ有段坏	R9	12711						

第８図　ＳＩ55竪穴住居跡出土遺物（２）



No.	土色・土性	概　要	
1	暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルト	地山小礫を多量に含む。しまりなし。	【表土】
2	黒褐色(7.5YR3/2)シルト	灰白色火山灰ブロックを含む。	【ＳＩ57－1層】
3	にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト	灰白色火山灰層。	【ＳＩ57－2層】
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	地山小粒含む。しまりあまりなし。	【ＳＩ57－3層】
5	黒褐色(7.5YR3/2)シルト	地山小礫を多量に含む。しまりあり。	【ＳＩ57－4層】
6	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山小礫を多量に含む。周溝内堆積層。	【ＳＩ57－5層】
7	黄橙色(10YR8/6)シルト	地山小礫を含む。しまりあり。	【土壙堆積層】
8	暗褐色(10YR3/3)シルト	地山小礫を多量に含む。しまりあり。	【土壙堆積層】

第９図　ＳＩ57竪穴住居跡断面図（1／50）

のものには、回転糸切り無調整の坏の口縁～底部破片(14)、高台坏の体部～高台部破片(15)、小型甕の口縁～体部破片(16)がある。須恵器には坏・蓋・甕・鉢破片、須恵系土器には坏の口縁～底部破片（21）がある。

床面や第２層・第１層から出土した製塩土器(13・23～29)には、２～３cmの間隔で輪積み痕跡が明瞭に残る。口唇部は断面方形である。色調は橙褐色で、胎土には砂粒・ガラスを多く含む。

ＳＩ56竪穴住居跡（第４図）

調査地区東端中央南寄りに位置している。住居跡の西側の一部のみ検出し、調査地区外の東に延びる。位置的にみてＳＤ54大溝と重複するが、この部分で大溝の堆積土が削平されて残っていなかったため、新旧関係は把握できなかった。調査期間との関係で、精査は行なっていない。規模は南北約4.2ｍで方向は北で西に約４°偏る。遺物は出土していない。

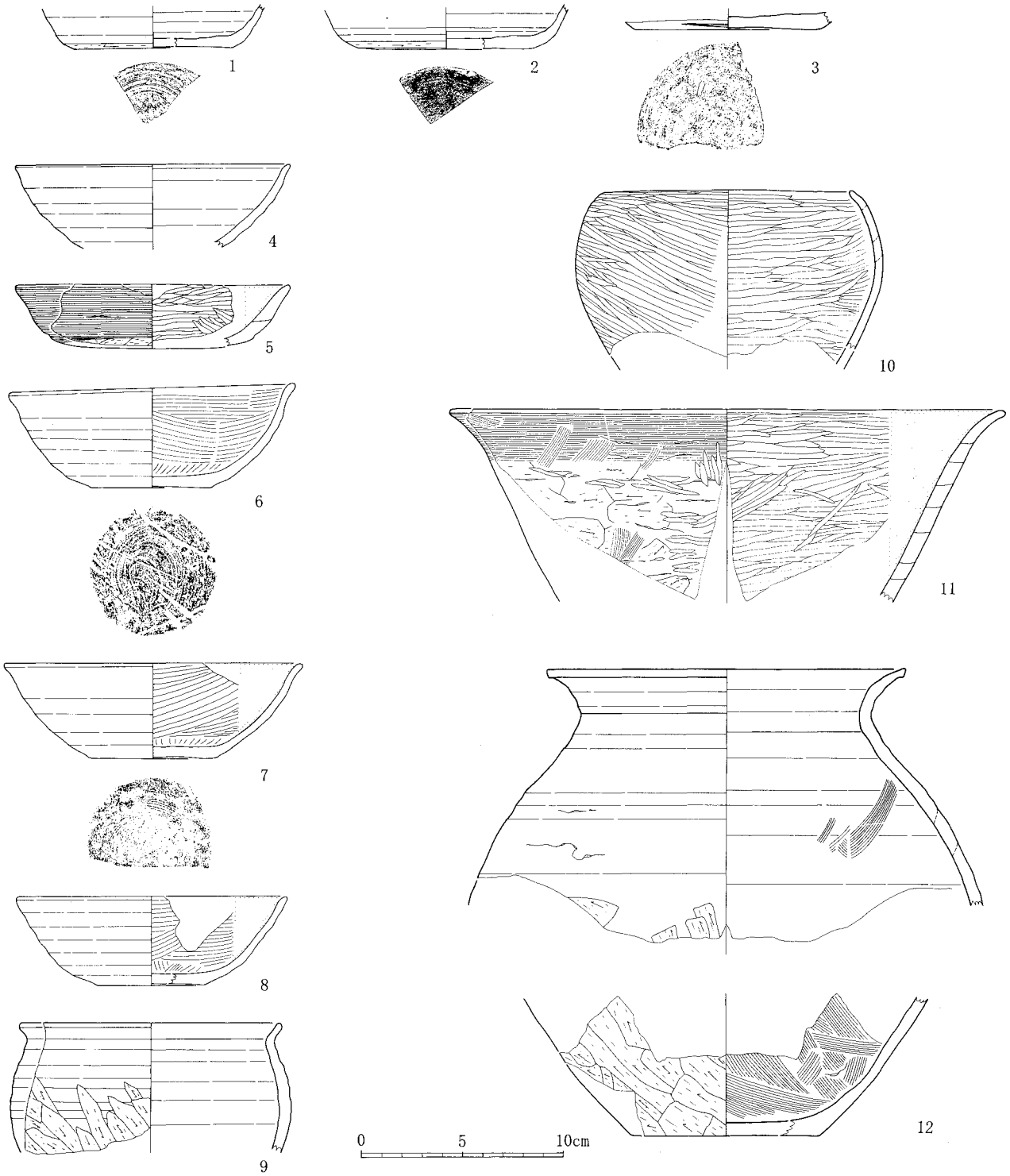
ＳＩ57竪穴住居跡（第３・９・10図、図版３－3）

土取り箇所の西端で一部のみ検出した。規模は南北約5.0ｍで、方向は西で北に約25°偏る。北辺には幅約20cm、深さ約40cmの断面Ｕ字形の周溝が巡る。

遺物は堆積土から回転ケズリされた須恵器坏の体下部～底部破片(第10図１・２、図版７)が出土した。

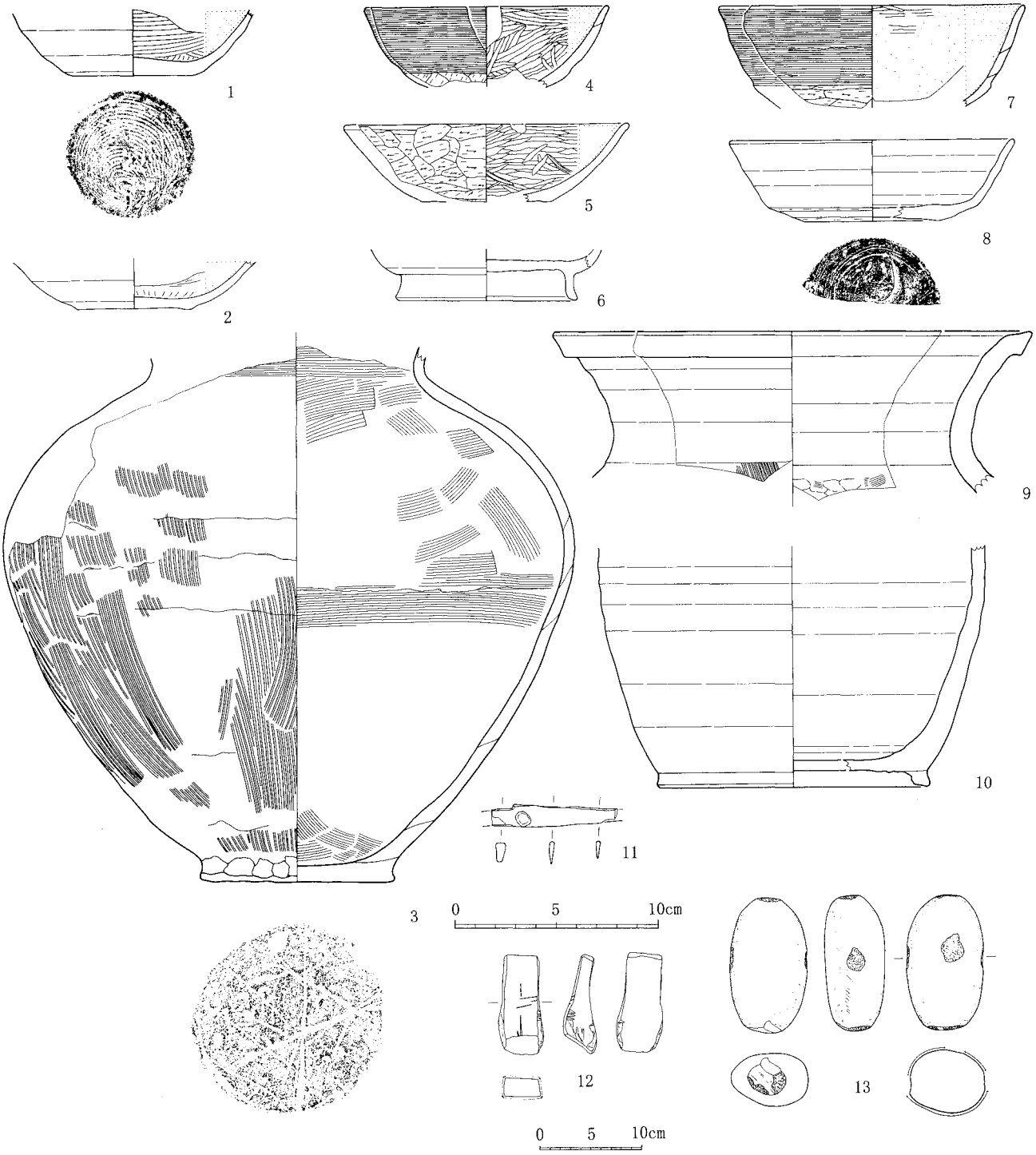
【その他の遺構】

検出したＳＫ58～69土壙の規模・重複関係などは表３に示した。また、ＳＫ58～60・66・67土壙から出土した主な遺物は第10・11図に掲載した。



番号	遺構	種　類	特　徴	登録	箱番号	番号	遺構	種　類	特　徴	登録	箱番号
1	SI57	須恵器坏	回転ヘラケズリ	R31	12712	7	SK59	土師器坏	回転糸切り無調整	R54	12713
2	SI57	須恵器坏	回転ヘラケズリ	R32	12712	8	SK59	土師器坏	回転糸切り無調整	R57	12713
3	SK58	須恵器坏	ヘラ切り	R50	12713	9	SK59	土師器甕	ロクロ調整。小型	R53	12713
4	SK59	須恵系土器坏	黄褐色。胎土微細	R55	12713	10	SK59	土師器鉢	非ロクロ。ヘラミガキ	R51	12713
5	SK59	土師器坏	非ロクロ。	R56	12713	11	SK59	土師器鉢	非ロクロ。内黒	R58	12713
6	SK59	土師器坏	回転糸切り無調整	R52	12713	12	SK59	土師器甕	ロクロ調整。中型	R59	12711

第10図　ＳＩ57竪穴住居跡、ＳＫ58・59土壙出土土器



番号	遺構	種　類	特　　徴	登録	箱番号	番号	遺構	種　類	特　　徴	登録	箱番号
1	SK60	土師器坏	回転糸切り無調整	R61	12714	8	表土	須恵器坏	回転ヘラケズリ	R5	12711
2	SK60	土師器坏	回転糸切り無調整	R62	12714	9	表土	須恵器甕	口径23.6cm	R100	12712
3	SK60	土師器甕	非ロクロ。木葉痕	R20	12716	10	表土	須恵器壺	高台径13.4cm	R24	12711
4	SK66	土師器坏	非ロクロ	R68	12713	11	表土	刀子	茎～刃部破片。	R112	12719
5	SK66	土師器坏	非ロクロ	R67	12713				平棟平造り		
6	SK66	須恵器高台坏	回転ヘラケズリ	R66	12713	12	SK58	砥石	砂岩製。4面研磨	R106	12714
7	SK67	土師器坏	非ロクロ	R70	12713	13	表土	磨石	砂岩製。研磨、敲打痕	R107	12714

第11図　ＳＫ58・60・66・67土壙、表土の出土遺物

遺構名	平面形	長軸	短軸	深さ	重　複　関　係
SK58土壙	不整形	2.7m	2.5m	10cm	
SK59土壙	楕円形	1.6m	1.2m	60cm	ＳＩ55住居跡より新しい
SK60土壙	楕円形	0.7m	0.5m以上	20cm	ＳＩ55住居跡より新しい
SK61土壙	楕円形	0.9m以上	0.4m以上	20cm	ＳＩ55住居跡より新しい
SK62土壙	楕円形	0.7m	0.4m以上	20cm	ＳＩ55住居跡より新しい
SK63土壙	不整形	0.7m	0.5m	30cm	ＳＩ55住居跡より新しい
SK64土壙	不整形	0.9m	0.6m	20cm	ＳＩ55住居跡より新しい
SK65土壙	不整形	5.0m	1.6m	40cm	SD54外郭大溝より新しい
SK66土壙	不整形	1.1m	0.7m	5cm	底面に焼け面あり
SK67土壙	不整形	0.8m	0.7m	15cm	SA53材木塀より新しい
SK68土壙	不整形	2.1m	1.3m	20cm	SA53材木塀より新しい
SK69土壙	不整形	0.9m	0.4m以上	15cm	SA53材木塀より新しい
遺構名	断面形	長さ	幅	深さ	備　　考
ＳＤ70溝	U字形	2.5m以上	1.5m	20cm	SA53材木塀より古い

表１　外郭南辺西端地区検出の土壙・溝の一覧

【表土の出土遺物】

表土の出土遺物のうち、特に注目される遺物を抽出して第11図に掲載した。

（２）外郭東辺南半地区

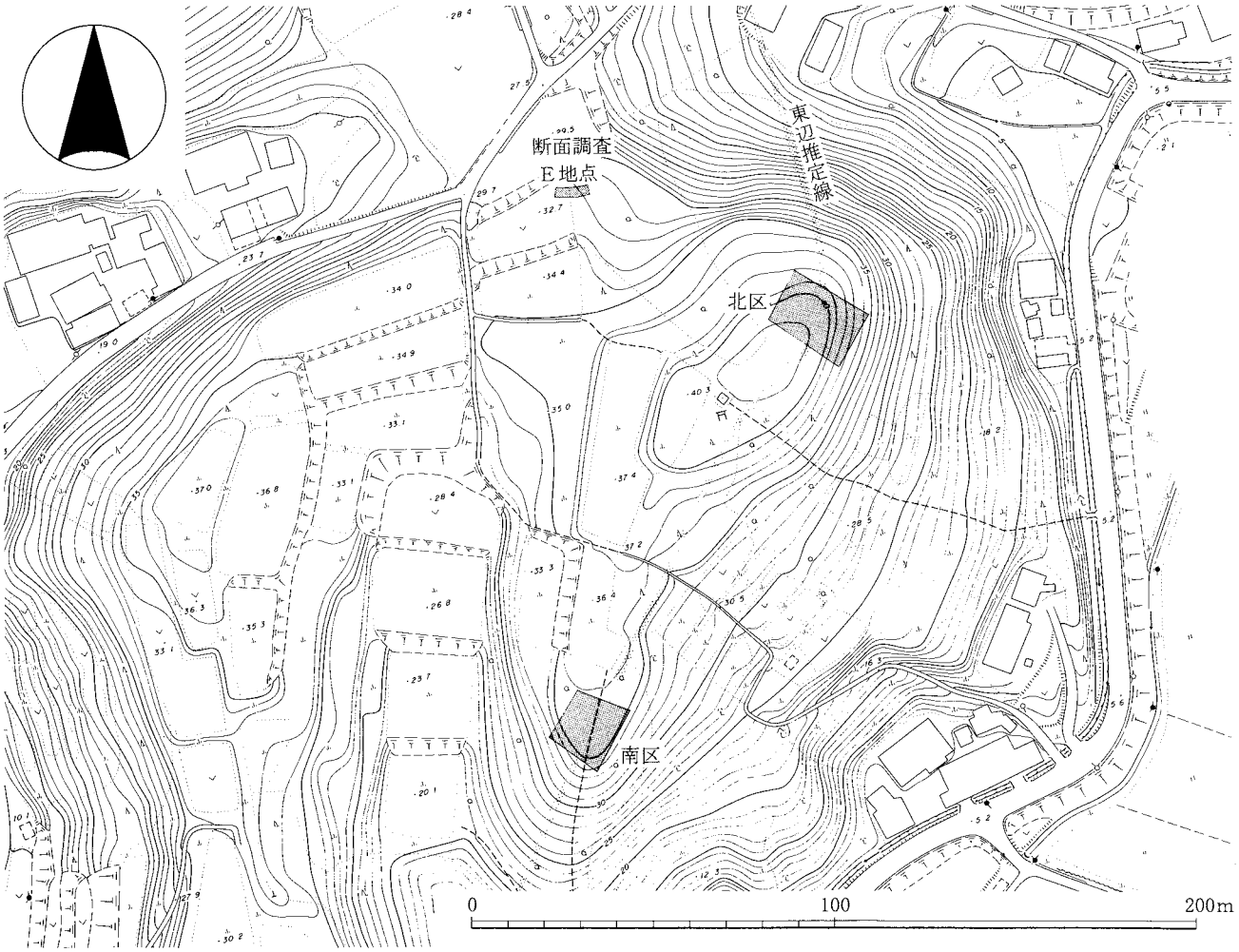
調査区は、第４次調査で検出した外郭東辺のほぼ南延長線上の南北２ヵ所に設定した(第２・12図)。北区は南北方向の丘陵尾根部分に位置し、調査面積は170㎡である。南区は北東から南西に走る丘陵尾根部分に位置し、調査面積は130㎡である。

１）北区

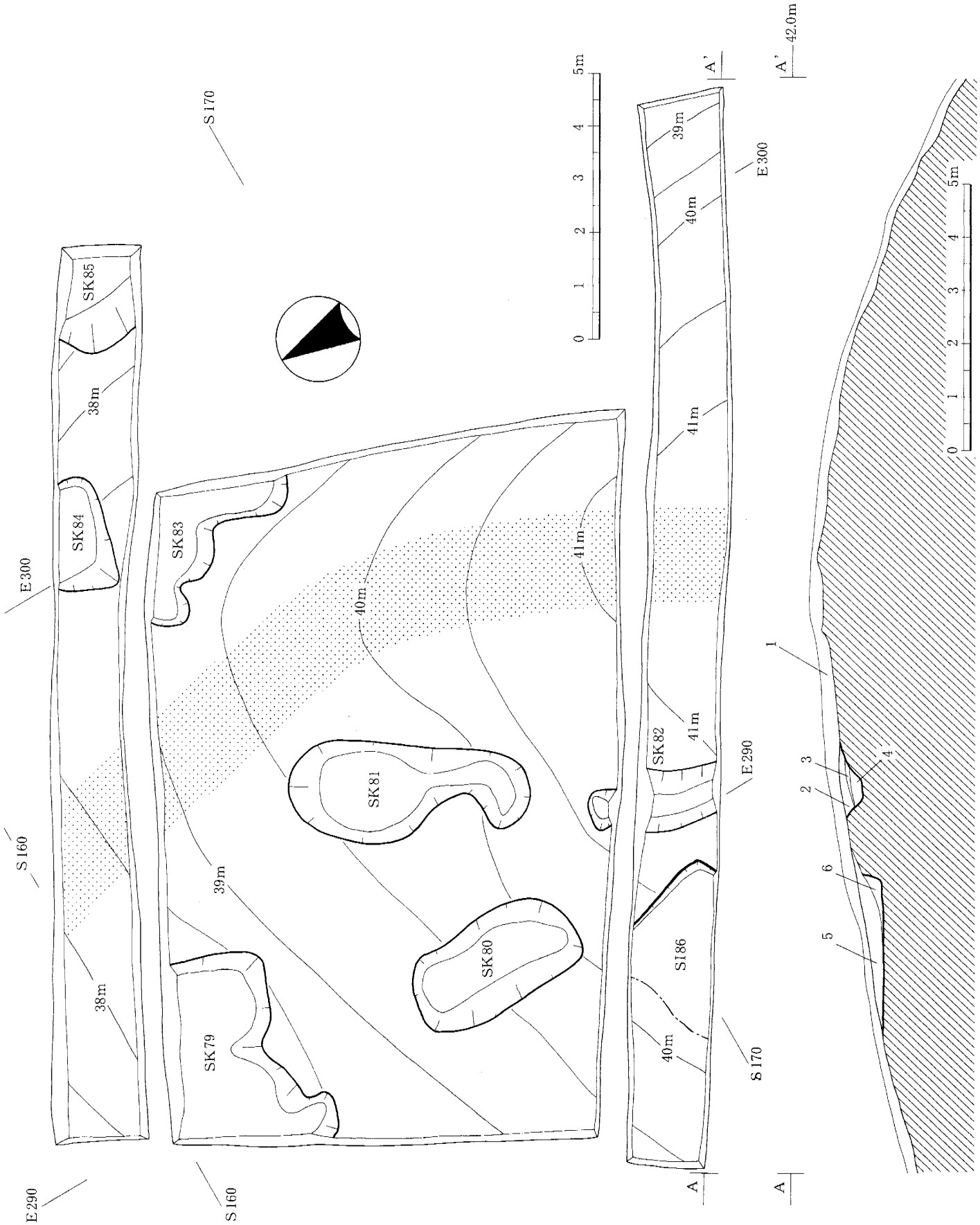
北区は南北方向の丘陵尾根部分に位置している。竪穴住居跡１棟と土壙７基を検出している(第13図、図版４)。

【土取り跡】

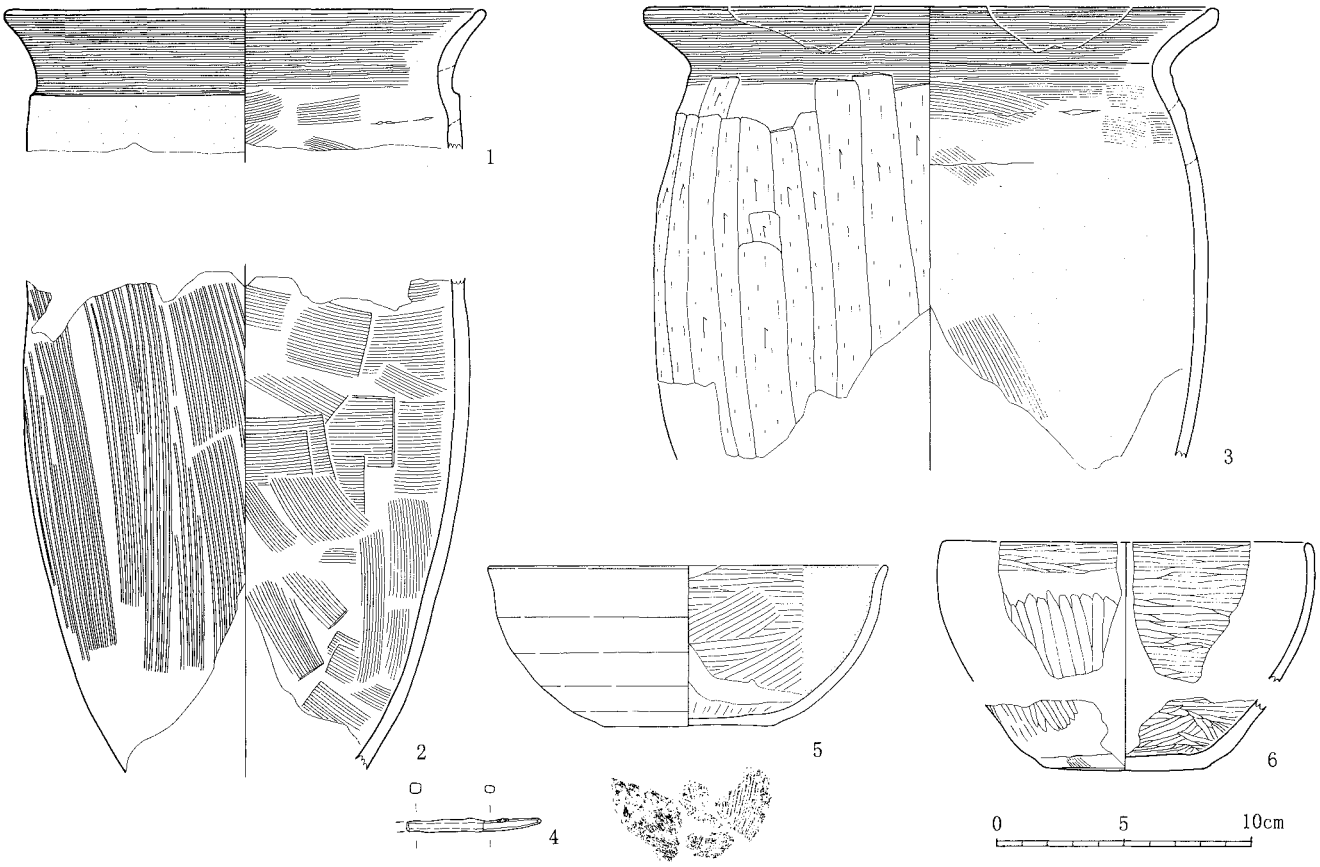
土壙は地山の粘板岩面で検出しており、調査区のほぼ中央部を通る尾根を避けるようにその東西に分布している。西側に４基（ＳＫ79～82)、東側に３基（ＳＫ83～85）ある。平面形はＳＫ80が楕円形、ＳＫ82が溝状であるなど形にまとまりは認められない。大きさは、ＳＫ80が２ｍ×3.5ｍほど、ＳＫ82が１ｍ×2.5ｍ以上と様々である。深さは最も浅いＳＫ80で20cmほど、最も深いＳＫ85で60cmほどである。堆積土は深いもので２～３層に分けられるが、いずれも地山の粘板岩片を主体とする明



第12図　外郭東辺南半地区調査区位置図（1／2,000）



第13図　外郭東辺南半地区　北区平面図・断面図（1／100）



番号	遺構	種　類	特　徴	登録	箱番号	番号	遺構	種　類	特　徴	登録	箱番号
1	SI86	土師器甕	非ロクロ	R22	12716	4	SI86	鉄鏃	茎破片	R115	12719
2	SI86	土師器甕	非ロクロ	R21	12716	5	SI93	土師器坏	回転糸切り無調整	R91	12714
3	SI86	土師器甕	非ロクロ	R19	12716	6	SI93	土師器坏	非ロクロ。両面ミガキ	R92	12714

第14図　ＳＩ86・93竪穴住居跡出土土器

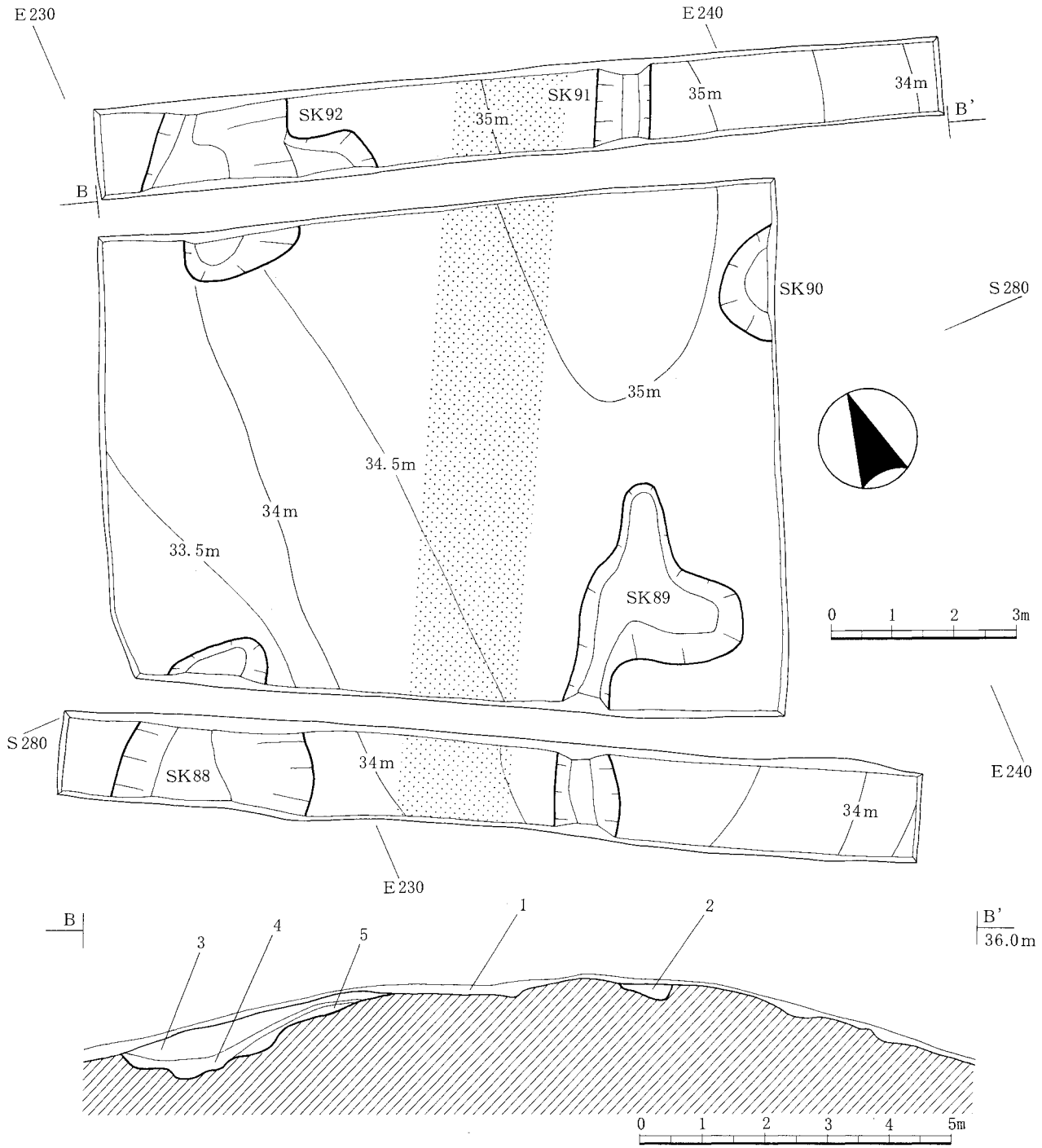
黄褐色粘質土や黄橙色土、黒褐色粘質土である。この中で、北区の尾根の西側にあるＳＫ81は、堆積土の中に灰白色火山灰層がみられることから古代に掘り込まれたものであることがわかる。遺物は出土していない。

【竪穴住居跡】

ＳＩ86竪穴住居跡（第13・14図、図版４）

調査区の南西隅の地山粘板岩面で検出した。検出したのは、地形の高い部分にある住居跡の北東隅部で、北辺約1.5m、東辺約0.5mである。壁はほぼ垂直で、深さは最も残りのよい北東隅で約50cmある。掘方底面をそのまま床面としており、貼床や周溝はない。また、カマド・貯蔵穴・主柱穴については不明である。堆積土は２層に分けられ、いずれも自然堆積である。１層は１～２cmほどの粘板岩片を多量に含む褐色土、２層は１～２cmほどの粘板岩片を含む暗褐色土で、壁際から床面にかけて堆積している。

遺物はいずれも破片資料であるが、床面から非ロクロ調整の土師器甕、スサ入りの粘土塊、堆積土から非ロクロ調整の土師器甕（第14図１～３）・壷、鉄鏃（４）の破片、スサ入りの粘土塊が出土した。



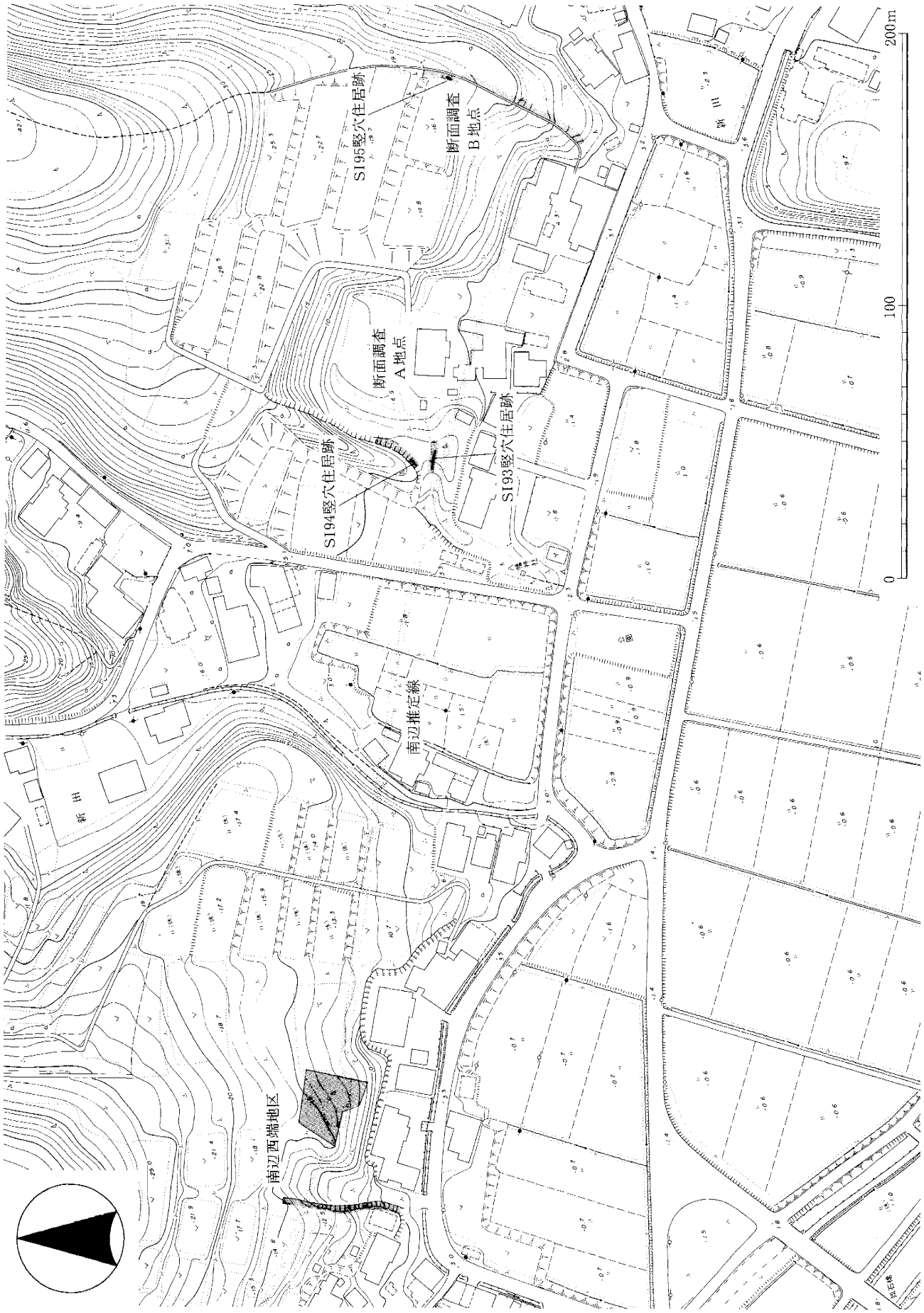
No.	土色・土性	概　　要
1	黒褐色(5YR3/1)シルト	地山粘板岩片を多量に含む。しまりなし。【表土】
2	にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質シルト	地山粘板岩片を含む。しまりややあり。【SK82−1層】
3	黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト	地山粘板岩片を含む。しまりややあり。【SK82−2層】
4	明黄褐色(10YR7/6)粘土質シルト	地山粘板岩片を含む。しまりややあり。【SK82−3層】
5	褐色(7.5YR4/3)粘土質シルト	地山粘板岩片を多く含む。しまりあり。【SI86−1層】
6	暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト	地山粘板岩片を多く含む。しまりあり。【SI86−2層】

北区断面土層観察表

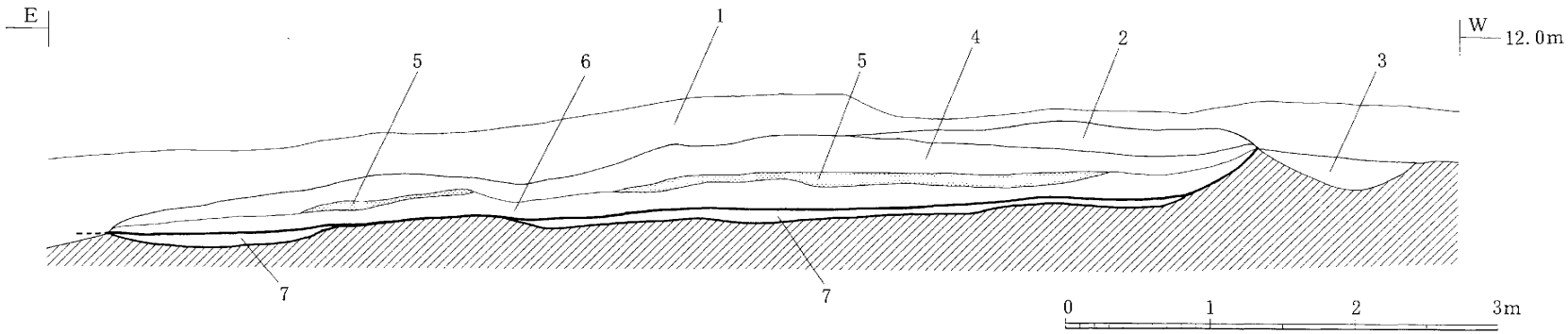
No.	土色・土性	概　　要
1	黒褐色(5YR2/2)シルト	地山粘板岩片を含む。しまりなし。【表土】
2	黒褐色(7.5YR3/2)シルト	地山粘板岩片を含む。しまりなし。【SK92−1層】
3	にぶい黄橙色(10YR6/4)礫	地山粘板岩小礫の堆積土。【SK92−2層】
4	浅黄橙色(10YR8/4)礫	地山粘板岩小礫の堆積土。【SK92−3層】
5	明黄褐色(10YR6/6)礫	地山粘板岩小礫の堆積土。【SK92−4層】

南区断面土層観察表

第15図　外郭東辺南半地区南区平面図・断面図（1／100）



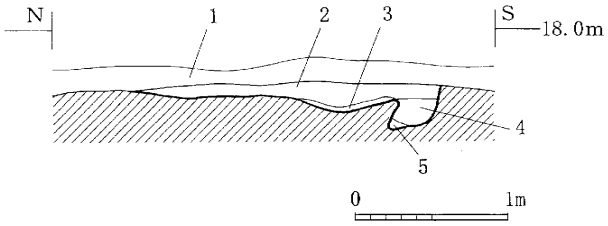
第16図　外郭南辺地区断面調査地点位置図（1／2,000）



A地点　断面図（1／50）

No.	土色・土性	概　　要	
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト	しまりなし。	【表土】
2	暗褐色(10YR3/4)シルト	3～5mmの地山小礫を含む、しまりなし。	【堆積層－1層】
3	褐色(7.5YR4/3)シルト	3～5mmの地山小礫を含む、しまり若干あり。	【堆積層－2層】
4	にぶい黄橙色(10YR5/4)シルト	3～5mmの地山小礫を非常に多く含む、しまりあり。	【ＳＩ93－1層】
5	にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト	灰白色火山灰層。	【ＳＩ93－2層】
6	暗褐色(10YR3/4)シルト	3～5mmの地山小礫を非常に多く含む、しまりあり。	【ＳＩ93－3層】
7	黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト	しまり非常にあり。上面に部分的に焼土・炭化物が分布。	【ＳＩ93－貼床】

A地点（ＳＩ93竪穴住居跡）断面土層観察表

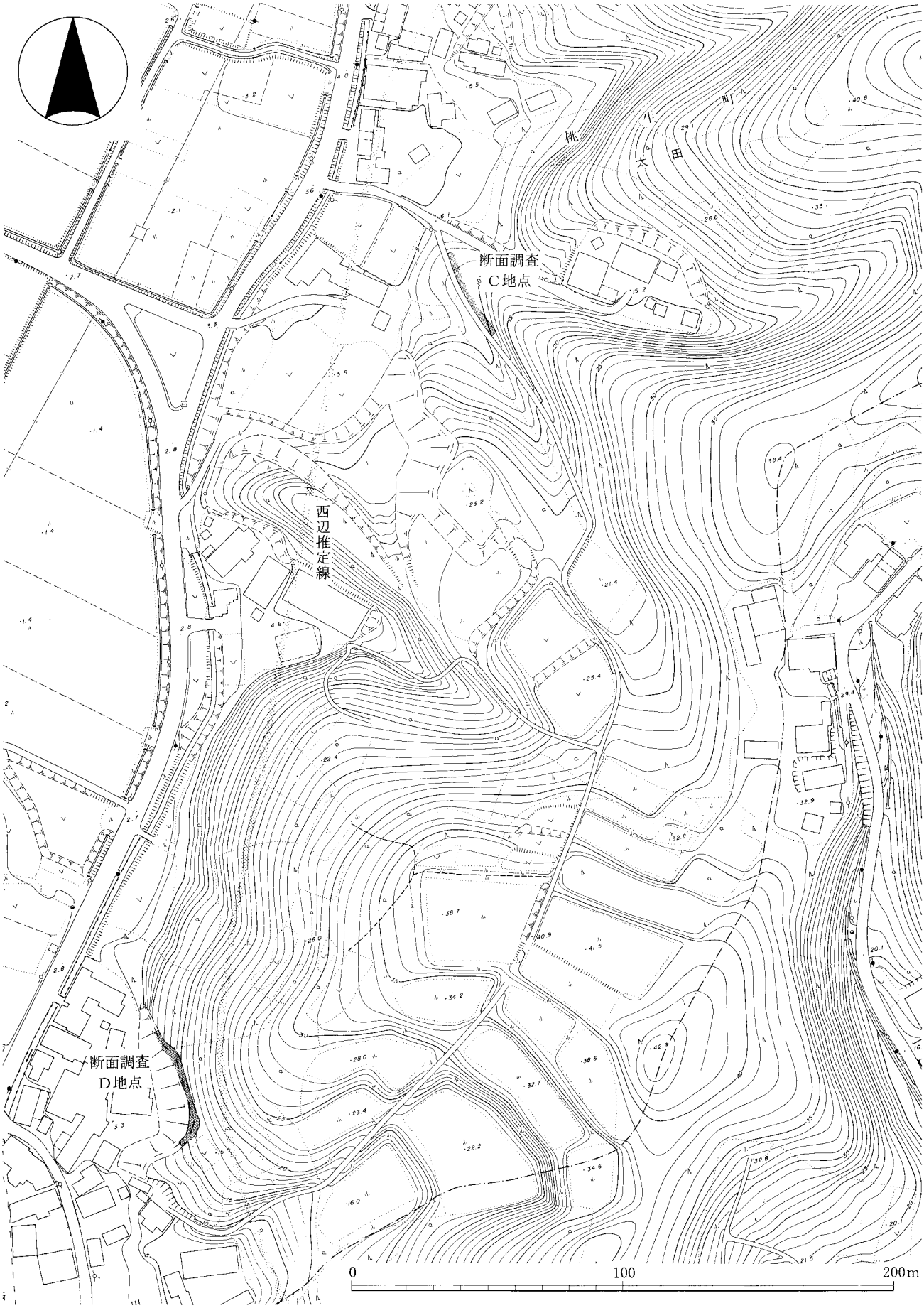


B地点　断面図

No.	土色・土性	概　　要	
1	黄褐色(10YR5/8)シルト	さらさらしており、しまりなし。	【表土】
2	明黄褐色(10YR6/6)シルト	地山粒を多量に含み、炭化物を若干含む。しまりあり。	【ＳＩ95－1層】
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト	地山粒・炭化物を多量に含む。	【ＳＩ95－2層】
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト	地山粒・炭化物を含む。	【ＳＩ95－3層】
5	黄橙色(10YR6/6)シルト	地山粒を含む。	【ＳＩ95－4層】

B地点（ＳＩ95竪穴住居跡）断面土層観察表

第17図　断面調査A・B地点断面図（1／50）



第18図　外郭西辺地区調査地点位置図（1／2,000）

2）南区

南区は北東方向から南西方向に走る丘陵尾根部分に位置している（第２・12・15図）。土壙５基を検出した（第15図、図版５）。

【土取り跡】

土壙は、北地区と同様に尾根を避けるようにその両側に分布しており（ＳＫ88～92）、いずれも地山の粘板岩面で検出している。平面形は、ＳＫ88が楕円形、ＳＫ89・91が溝状であるなど、北地区同様に形にまとまりは認められない。大きさは、ＳＫ88が５ｍ×４ｍ以上、ＳＫ89が１ｍ×９ｍ以上と比較的大きい。深さは最も浅いＳＫ88が10cm、最も深いＳＫ92が80cmほどである。堆積土はＳＫ92土壙で３層に分けられるが、いずれも地山の粘板岩砕片が主体となる層である。遺物は出土していない。

（３）断面調査地点

外郭区画施設の推定線付近を対象に、断面観察が可能な南辺のＡ・Ｂ２地点（第２・16・17図）、西辺のＣ・Ｄ２地点（第２・18図）、東辺のＥ地点（第２・12図）の合計５地点で調査を実施した。その結果、いずれの地点でも外郭区画施設を検出することはできなかったが、外郭南辺東半のＡ地点で竪穴住居跡を２棟（ＳＩ93・94）、またＢ地点で竪穴住居跡を１棟（ＳＩ95）確認している（第16・17図）。このうちＳＩ94については、調査地が危険なため住居跡の存在を確認しただけに留めた。

ＳＩ93住居跡は東西方向の断面で長さ約７ｍ確認している（第16・17図）。壁は斜めに掘られており、約50cm残存している。床面は貼床されている。堆積土は３層に分けられ、２層が灰白色火山灰層である。

遺物はいずれも破片資料であるが、貼床から非ロクロ調整の土師器で内黒の坏が１点、灰白色火山灰層下の３層から土師器と須恵器が少量と製塩土器片が３点が出土した。土師器にはロクロ調整と非ロクロ調整のものがある。ロクロ調整のものには底部が回転糸切り無調整で内黒の坏１点（第14図５）、非ロクロ調整のものには両面をヘラミガキした坏（第14図６）と甕がある。須恵器には鉢３点、蓋の端部破片１点、甕４点がある。

ＳＩ95住居跡は、長さ２ｍほど確認しており、壁は約20cm残存している（第16・17図）。周溝がみられ、掘方底面を床面にしている。堆積土は４層に分けられる。遺物は堆積土１層から須恵器の坏の口縁部破片が１点出土した。

Ⅵ. 考　　察

第５次調査は外郭南半部の区画施設の検出を目的に、外郭南辺西端１ヵ所、東辺南半２ヵ所の３地区の発掘調査と南辺２ヵ所、西辺２ヵ所、東辺１ヵ所の５地点で断面調査を実施した。その成果については、第Ⅴ章で各地点毎に、検出された遺構と出土した遺物について説明した。ここでは遺構と出土遺物について若干の検討を加える。

（１）外郭区画施設

【外郭南辺西端地区】

外郭南辺西端地区では、丘陵南端の丘陵緩斜面から丘陵裾の斜面に変換する部分のやや上でＳＡ53材木塀跡と、その南側約６ｍを平行して走るＳＤ54大溝を検出した。

ＳＡ53材木塀跡とＳＤ54大溝は、ほぼ平行する位置関係から対になって機能していたとみられ(註１)、このことから両者は同時期と考えられる。

これらの遺構の年代を考える資料としては、ＳＡ53材木塀跡の確認面出土の土師器甕と須恵器坏の破片、ＳＤ54大溝出土の土師器鉢・甕、須恵器坏・高台坏などの出土遺物とＳＡ53材木塀跡と重複し、それより新しいＳＩ55竪穴住居跡の堆積土やＳＤ54大溝堆積土の２層上に堆積していた灰白色火山灰層とがある。

ＳＡ53材木塀跡出土の土器は少破片のためその所属年代を明らかにし得ないが、ＳＤ54大溝出土の土師器は、その特徴から東北地方南半の土師器編年の国分寺下層式に位置付けられる(氏家：1967)。須恵器は桃生城跡第３次調査で政庁西脇殿から出土した須恵器(宮城県多賀城跡調査研究所：1995)と比較すると、坏の器形や再調整の特徴が西脇殿出土のものと類似している。したがって、ＳＤ54大溝出土の須恵器は政庁西脇殿出土の須恵器と同じ８世紀第３四半世紀頃に位置付けられる。この年代は土師器の国分寺下層式で考えられている年代の範疇である。

一方、灰白色火山灰は10世紀前葉(承平４年以前)に降下したものと考えられており(白鳥：1980)、ＳＩ55竪穴住居跡の外延溝とみられるＳＤ71溝との重複関係から、10世紀前葉には廃絶していたＳＩ55竪穴住居跡の構築時には、ＳＡ53材木塀跡は機能を失っていたことやＳＤ54大溝は10世紀前葉には埋まり切っていたことがわかる。

以上のことから、ＳＡ53材木塀跡とＳＤ54大溝は８世紀第３四半世紀の桃生城存続期間のものと見られ、外郭南辺の区画施設をなしていたものと考えられる。そして、これらは10世紀前葉(承平４年以前）には機能を失っていたことが知られる。

【外郭東辺南半地区】

第４次調査で検出した外郭東辺のほぼ南延長線上で、丘陵尾根部分に位置する北区と南区の２カ所を調査した。

北区は南北方向の丘陵尾根部分で、その尾根を避ける形で分布する土壙を西側で４基、東側で３基検出している。これらの土壙は、ＳＫ81土壙の堆積土の中に灰白色火山灰層がみられることから、古代に掘り込まれたものであることがわかる。さらに、第４次調査で検出した２条のＳＦ42・43土塁の両側に土取り穴群が連続して検出されている例と同様の様相を呈することから、尾根線上にあった築地か土塁のような積み土を伴う区画施設に伴う土取り穴と考えられる。

南区は北東方向から南西方向に走る尾根部分で、北区と同様に尾根を避ける形でその両側から５基の土壙が検出された。北区の状況と類似したものであるから、ここでも尾根上に区画施設の存在が想定できる。

（２）竪穴住居跡

外郭南辺西端地区で３棟、外郭東辺南半地区北区で１棟、断面調査のＡ地点で２棟、Ｂ地点で１棟の竪穴住居跡を検出している。このうち精査を行ったのは南辺西端地区のＳＩ55竪穴住居跡だけで、それ以外は確認のための部分的な調査である。

【外郭南辺西端地区】

精査したＳＩ55竪穴住居跡は、ＳＡ53材木塀跡に隣接しており、竪穴住居跡より新しいＳＫ59土壙が両者を切っている。このため、ＳＩ55竪穴住居跡とＳＡ53材木塀跡との直接の重複関係は明確ではないが、ＳＡ53材木塀跡を切るＳＤ71溝がＳＩ55竪穴住居跡の外延溝の可能性が考えられ、ＳＡ53材木塀跡→ＳＩ55竪穴住居跡→ＳＫ59土壙の関係が成り立ち、ＳＩ55竪穴住居跡は桃生城存続期と考えられたＳＡ53材木塀跡より新しいことになる。一方、ＳＩ55竪穴住居跡の堆積土２層は、10世紀前葉（承平４年以前）に降下した灰白色火山灰のブロックを含んでおり、それ以前に廃絶していることがわかる（第６図）。

住居跡の年代を考える遺物としては、床面から出土した須恵器坏・甕や周溝から出土した土師器坏などがある（第７図・第８図５）。土師器坏は口縁部を欠くがロクロ調整で、底部が回転糸切り無調整のものである。内面はミガキ・黒色処理されるもので、ミガキの方向は放射状となる。このような土師器坏は、東北地方南半の土師器編年の表杉ノ入式に位置付けられ（氏家：1957）、現在、９世紀以降の年代が考えられている（白鳥：1980）。一方、堆積土１・２層からは須恵系土器坏が出土しており、この住居跡は須恵系土器の出現する９世紀末には機能を失っていたと考えられる（宮城県多賀城跡調査研究所：1992 註２）。これらのことからＳＩ55竪穴住居跡の年代は９世紀代のものであることが知られ、底部がヘラ切り無調整の須恵器坏の年代とも矛盾しないと考えられる。

ＳＩ57竪穴住居跡も堆積土に厚い灰白色火山灰層があり（第９図）、10世紀前葉（承平４年以前）には廃絶していたと思われる。

【外郭東辺南半地区北区】

ＳＩ86竪穴住居跡の部分的な調査で、非ロクロ調整の土師器甕が３点出土している（第14図）。これらの甕は器形や調整の特徴などから国分寺下層式に位置付けられ、ＳＩ86竪穴住居跡は桃生城存続

期のものと思われる。

【断面調査地点】

Ｃ地点からは、２軒の竪穴住居跡が検出され、このうちＳＩ93竪穴住居跡から土師器坏が２点出土している（第14図）。坏のうち１点は、底部が回転糸切り無調整で内黒のもので、住居内堆積土に灰白色火山灰層が認められることから（第17図）、ＳＩ55竪穴住居跡とほぼ同時期である可能性がある。

Ｄ地点からは、竪穴住居跡が１軒検出されたが、年代などを考える資料は出土していない。

各地区・各地点の竪穴住居跡の年代などを検討した。平安時代の竪穴住居跡から特殊な遺物として製塩土器と漆皮膜が出土している。製塩土器破片はＳＩ55竪穴住居跡の床面や堆積土から出土し、堆積土からは漆皮膜の付着した土器や漆皮膜も出土している。製塩土器破片はＳＩ93竪穴住居跡からも出土してる。

（３）外郭区画施設のまとめと問題点

これまで検出した外郭区画施設には、第１・２次調査の北辺中央部（宮城県多賀城跡調査研究所：1975・1976）、第３次調査の北東隅（宮城県多賀城跡調査研究所：1995）、第４次調査の北西隅・東辺北半部（宮城県多賀城跡調査研究所：1996）があり、それに今回の第５次調査の南辺西端地区・東辺南半部２ヵ所の調査成果を加えると、桃生城の規模は東西約800m、南北約650mであることがほぼ確定できた。ただし、それぞれの地区の区画施設には、次のとおり構造的な違いが認められる。

①北辺中央部と北東隅の区画施設は、一条のＳＦ11（宮城県多賀城跡調査研究所：1975ではＳＦ05とする）土塁である。この土塁は北辺中央部で南に延びて城内を東郭と西郭に二分するＳＦ12土塁と接続している。この接続点の東約16mでＳＦ11土塁に新旧２時期が重複するＳＸ13（宮城県多賀城跡調査研究所：1975ではＳＦ06とする）Ａ・Ｂ張り出し土壇が付設されており、ＳＸ13土壇跡西辺より東ではＳＦ11土塁に、新旧２時期の重複がみられる。

②北西隅は、３条のＳＦ48Ｂ・50・52土塁と３条のＳＤ47・49・51溝で区画されている。最も内側のＳＦ48Ｂ土塁跡は、土塁構築前は基底幅約1.8m（６尺）のＳＦ48Ａ築地塀であった。他の土塁には重複はなかった。

③東辺北半部は、２条のＳＦ42・43土塁とそれらに挟まれたＳＤ41大溝で区画されている。尾根の頂部では、大溝が途切れＳＸ44土橋状遺構となり、通路として利用されていたものと思われる。いずれの遺構にも重複はない。

④東辺南半部は、尾根を挟む形で分布する土壙群以外は検出されなかったが、この土壙群が土取り穴で、これらに挟まれる尾根上に築地や土塁のような積土を伴う区画施設の存在が推定された。

⑤南辺西端部の区画施設は、ＳＡ53材木塀とその南を平行して走るＳＤ54大溝で、遺構の重複はない。

このように外郭区画施設は、北西隅、北辺中央部、北東隅、東辺北半部、東辺南半部、南辺西端部で様相を異にしている。桃生城跡において区画施設が、なぜ場所によって構造を異にするか、それらの区画施設がどのように接続していたのかなどについては、今後に残された大きな課題である。

註１　仙台市郡山遺跡の方四町と推定されているⅡ期官衙の外郭区画施設として、材木塀跡とその外側の大溝が伴って機能していることが知られている。

註２　多賀城跡第61次調査の第11層から須恵系土器耳皿が、第10層から須恵系土器坏などが出土し、第10層の須恵系土器は白鳥分類の「Ｄ群土器」の土師器と共伴していることが報告されている。「Ｄ群土器」は９世紀後半に位置付けられており、(白鳥：1980)、第11層・第10層土器群も同様の年代が考えられている。第10層土器群は、上部に灰白色火山灰の再堆積部分をもつ第９層の直下から出土しており、９世紀後半でも後葉から末にかけての時期と思われる。

引用・参考文献

宮城県多賀城跡調査研究所　1975：『桃生城跡Ⅰ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第１冊)

宮城県多賀城跡調査研究所　1976：『桃生城跡Ⅱ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第２冊)

宮城県多賀城跡調査研究所　1992：『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』

宮城県多賀城跡調査研究所　1995：『桃生城跡Ⅲ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第20冊)

宮城県多賀城跡調査研究所　1996：『桃生城跡Ⅳ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第21冊)

氏家和典　1957：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14集

氏家和典　1967：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題－」『山形県の考古と歴史』　柏倉亮吉教授還暦記念会刊

岡田茂弘・桑原滋郎　1976：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要Ⅰ』

白鳥良一　1980：「多賀城跡出土土器の変遷」　宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要Ⅶ』

報告書抄録

ふりがな	ものうじょうあと5
書名	桃生城跡Ⅴ
副書名	
巻次	
シリーズ名	多賀城関連遺跡発掘調査報告書
シリーズ番号	第22冊
編著者名	阿部恵・佐藤和彦・柳澤和明・白崎恵介
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所
所在地	〒985 宮城県多賀城市浮島字宮前133 TEL 022-368-0101
発行年月日	西暦 1997年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ものうじょうあと 桃生城跡	みやぎけん ものうぐん 宮城県桃生郡 かほくちょう 河北町 みやぎけん ものうぐん 宮城県桃生郡 ものうちょう 桃生町	04561 04565	004	38 度 31 分 49 秒	141 度 16 分 50 秒	19960701～ 19961011	800	調査計画に基づく学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桃生城跡	城柵	奈良時代 後半	材木塀跡 1条 大溝跡 1条 土取り跡 12基 竪穴住居跡 7棟	須恵器・土師器・須恵系土器・製塩土器・瓦・円面硯・鞴羽口・砥石・磨石・鉄鎌・鉄鏃・刀子	外郭南辺西端・東辺南半が確定し、桃生城の全体の規模が東西約800 m、南北約650 mであることがわかった。 南辺の区画施設として材木塀と大溝が検出され、外郭区画施設に新たに材木塀が加わった。

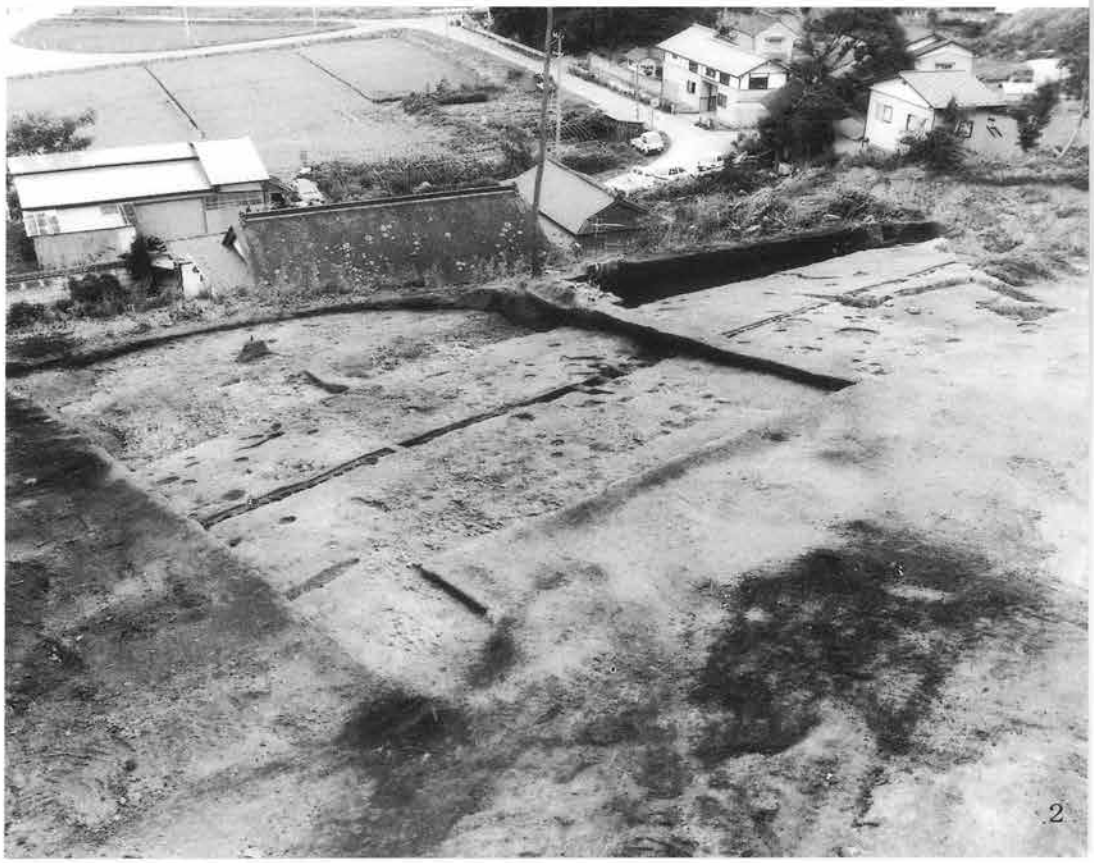
写 真 図 版

写真図版１

１．南辺西端調査地区遠景
（南斜上空から）

〔ネガＢ9327〕

２．南辺西端調査地区全景
（北東から）



〔ネガＢ9405〕

写真図版２

１．南辺西端調査地区西側断面
（東から）
右：ＳＡ53材木塀跡
左：ＳＤ54大溝

〔ネガＢ9419〕

２．ＳＡ53材木塀跡
（東から）
右：ＳＤ54大溝

〔ネガＢ9407〕

３．ＳＡ53材木塀跡
（西から）
〔ネガＢ9421〕

写真図版３

１．ＳＤ54大溝断面
（東から）

〔ネガＢ9424〕

1

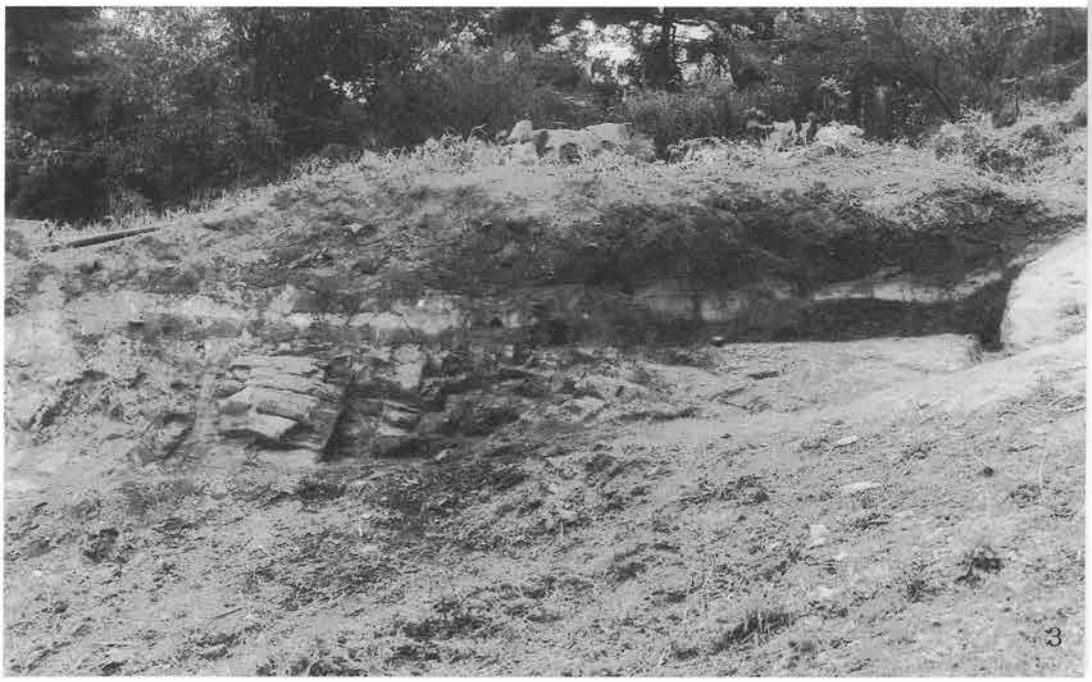
２．ＳＩ55竪穴住居跡
（東から）

〔ネガＢ9414〕

2

３．ＳＩ57竪穴住居跡
（東から）

〔ネガＢ9418〕



3

写真図版4

1．外郭東辺南半地区北区
（空撮）

〔ネガB9336〕

2．ＳＩ86竪穴住居跡
（北から）

〔ネガB9377〕

3．ＳＩ86竪穴住居跡
遺物出土状況
（北から）

〔ネガB9370〕

写真図版５

１．ＳＫ79土壙断面
（南から）

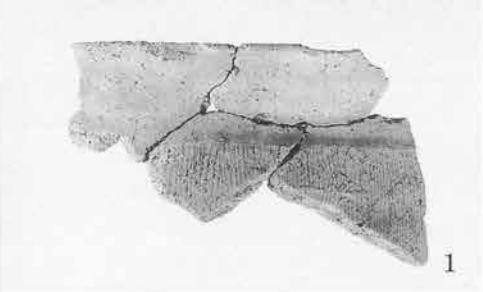
〔ネガＢ9379〕

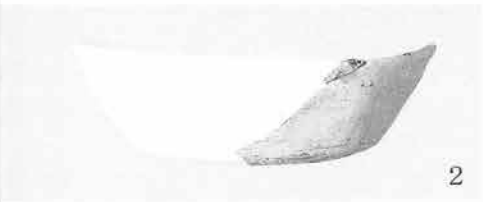
２．外郭東辺南半地区南区
（空撮）

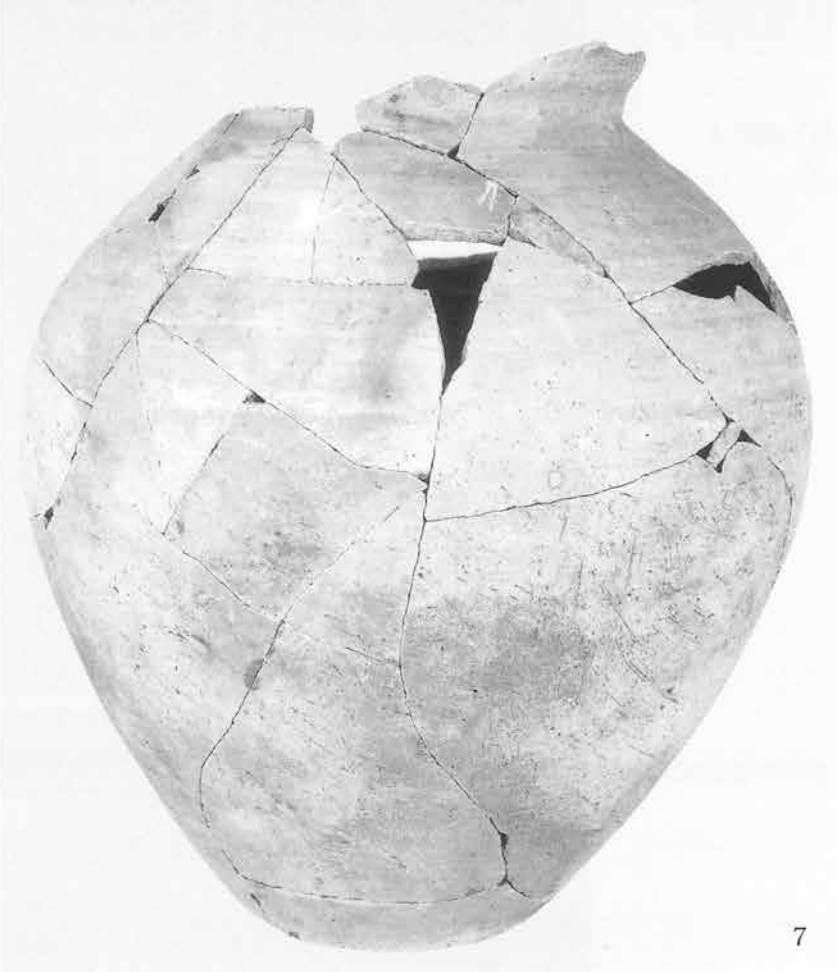
〔ネガＢ9344〕

３．外郭東辺南半地区南区
（北から）

〔ネガＢ9387〕



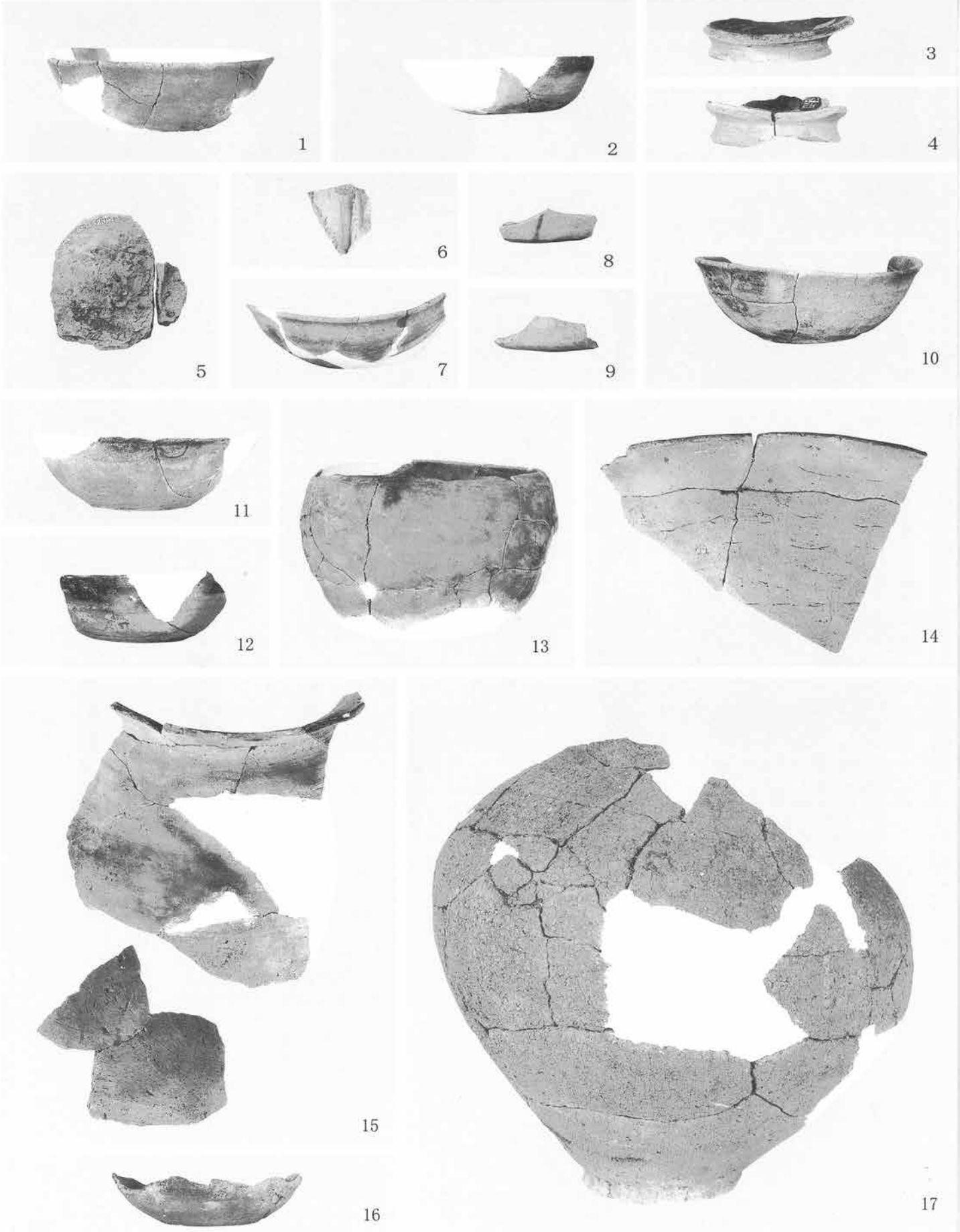




写真図版６

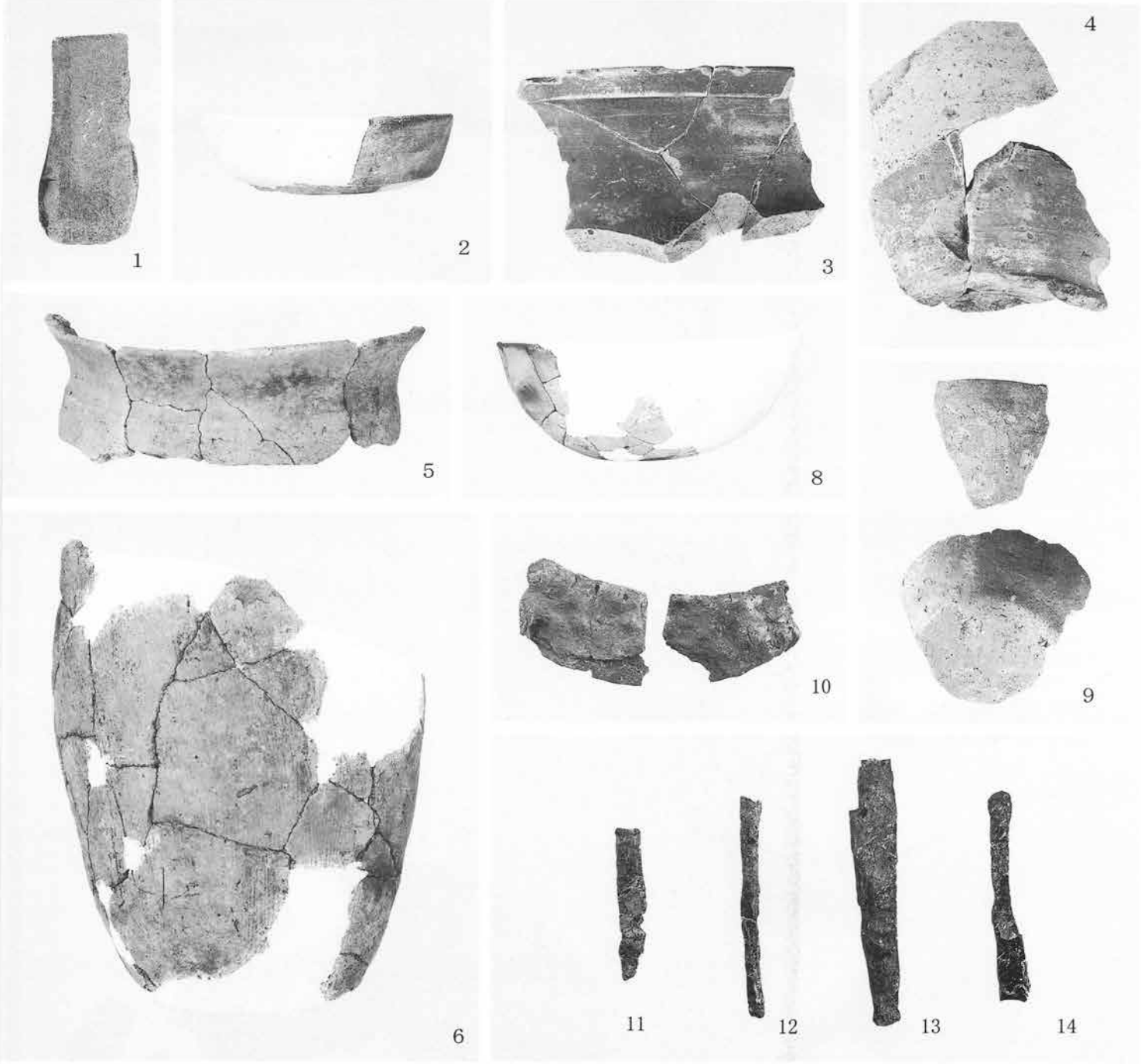
１～５．ＳＤ54大溝
６～９．ＳＩ55竪穴住居跡

１．土師器甕〔ネガＢ10193〕
２．須恵器坏〔ネガＢ10180〕
３．須恵器高台坏〔ネガＢ10178〕
４．土師器鉢〔ネガＢ10192〕
５．砥石〔ネガＢ10220〕
６．須恵器〔ネガＢ10168〕
７．須恵器〔ネガＢ10224〕
８．須恵器〔ネガＢ10225〕
９．砥石〔ネガＢ10218〕



写真図版７　１～７．ＳＩ55竪穴住居跡　８・９．ＳＩ57竪穴住居跡　10～15．ＳＫ59土壙　16・17．ＳＫ60土壙

1．須恵器坏〔ネガＢ10197〕
2．土師器坏〔ネガＢ10169〕
3．土師器高台坏〔ネガＢ10183〕
4．土師器高台坏〔ネガＢ10182〕
5．土師器甕・漆付着〔ネガＢ10177〕
6．円面硯〔ネガＢ10177〕
7．須恵系土器〔ネガＢ10170〕
8．須恵器坏〔ネガＢ10187〕
9．須恵器坏〔ネガＢ10188〕
10．土師器坏〔ネガＢ10196〕
11．土師器坏〔ネガＢ10198〕
12．土師器坏〔ネガＢ10181〕
13．土師器鉢〔ネガＢ10167〕
14．土師器鉢〔ネガＢ10206〕
15．須恵器甕〔ネガＢ10176〕
16．土師器坏〔ネガＢ10208〕
17．土師器甕〔ネガＢ10226〕



1．砥石〔ネガB10207〕
2．須恵器坏〔ネガB10171〕
3．須恵器甕〔ネガB10194〕
4．須恵器壷〔ネガB10175〕
5．土師器甕〔ネガB10229〕
6．土師器甕〔ネガB10228〕
7．土師器甕〔ネガB10227〕
8．土師器坏〔ネガB10179〕
9．土師器坏〔ネガB10210〕
10．鉄製鎌〔ネガB10231〕
11．鉄製刀子〔ネガB10232〕
12．鉄鏃?〔ネガB10232〕
13．鉄製刀子〔ネガB10232〕
14．不明鉄製品〔ネガB10232〕

写真図版８

1．ＳＫ58土壙
2～4・13．表土
5～7．ＳＩ86竪穴住居跡
8・9．ＳＩ93竪穴住居跡
10～12．ＳＩ55竪穴住居跡
14．ＳＩ86竪穴住居跡

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第22冊
桃 生 城 跡 V

平成９年３月25日印刷
平成９年３月31日発行

発行者　宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前133
ＴＥＬ.(022)368－0101
印刷所　東 杜 印 刷 株 式 会 社